

---

**脱版ケロロ軍曹 + black & white あります 3 撃侵力オストラゴンウォリアー あります**

百花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超小説版ケロロ軍曹 + black & white あります 3 撃

侵力オスドラゴンウォリアー あります

### 【Zコード】

Z0014R

### 【作者名】

百花

### 【あらすじ】

地球龍事件から一年。

テララの誕生日を祝うケロロ小隊の前に現れたのは、『もう1人の残滓』。彼の正体と目的は？ そして彼の後ろに立つResistanceの目的とは？

超小説版シリーズ第三段。ここに開幕。

## Episode: 0 始まりの時

目が覚めたら、冷たい石畳だけがあつて。周りは明るかつたけど、僕は一人だった。

「シオン……」

返事は無くて。風の音だけしかしなくて。

「どこに行っちゃったんですか？」

目が覚めて一番最初に逢いたかった人はどこにもいない。ずっとずっと、逢いたかったのに、いない。

「シオン……シオン……シオン……シオンシオンシオン！…」

なんで、いないの？

「僕はこれからも、『1人』なんですか！？」

外に出られても、こんな事なら意味無いよ。ねえ、シオン。見上げた空はとっても広かつた。それはすぐ見たかった物だつたのに、今はそんな事どうでもよかつた。

「教えて下さい……シオン」

「それはドラン家の当主の名か？」

僕はびっくりして本当に飛び上がつた。

「誰？」

そこにいたのはシオンと同じ人間だつた。でも大きくて怖い顔をした人間だつた。

「俺の事はいい。お前はさつきの騒ぎの元凶か？」

「そうかも知れません」

「ならない」

人間は怖い顔で僕を見た。

「……お前の名は？」

「ありませんよ。名前なんか」

「そうか」

人間の表情がその時初めて変わつた。驚いた訳じゃない。きっと悲

しんでのよつうな表情。

「……アスス」

「え？」

「お前は今日からアススだ。いいな」「はい……」

アスス……凄く綺麗な響きだつた。

「アスス、俺と来い。世界を変える為に、お前が欲しい」人間はそう言つて手を差し伸べた。似てないけど、シオンドダブる気がする。

「いいですよ」

僕はその手を力一杯握り締めた。

「それあなたの名前は？」

「俺はナスカ アンノウンだ」

「ナスカ……」

ナスカ、僕が初めて出会つた人間。そして……名前をくれた人。

「行くぞ」

「はい！」

僕はこの手を離さない。なにがあつても。それがたとえシオンの望みでも離さない。

僕の運命が大きく変わつた瞬間だつた。

To be continued

## Episode: 1 予兆（前書き）

すみません。二次創作ですがオリジナルオノリー回です。  
次回からは版権キャラをちゃんと出します。  
すみません

## Episode : 1 予兆

灰色の繁華街を2人の少女が連れ立つて歩く。片方の少女は少年のような赤茶けた髪の少女で、もう片方の少女はツインテールに結った緑髪を背中で揺らしていた。

2人の手には揃つた白い箱。中には小さなケーキが入つているのは2人だけが知ることだ。

「ねえ、今何時だっけ」

「11時少し前。焦らなくとも間に合つよ」

「ならいいけど」

赤茶けた髪少女は肩を竦める。その時だった。

「銀行強盗だーー！」

その言葉はあまりに突然だった。男の声に2人の少女は思わず顔を見合わせた。

揃いの黒コートが風に揺れる。

「「銀行強盗？」」

条件反射的に振り返ると道路を挟んで反対側、それなりに大規模な銀行の周りには既に人混みが出来始めていた。風に流れる騒ぎ声が耳に痛い。

「物好きだよね」

赤茶けた髪の少女は腰に片手を当てて苦笑する。奇妙な程冷静なのは命の危機に晒され続けたが故の慣れか。ともかく落ち着いた表情だ。

「け、警察に連絡しなきや」

一方緑髪の少女は慌てたように携帯を取ると素早く番号を押していく。

「え、能力者？　はい。分かりました。あ、私はA pd scoのリップ アドバンスと申します。はい……分かりました。では連絡とパートナーをお願いします」

電話を切つた緑髪の少女 リップ アドバンスはがっくりと肩を落とした。

「弥々華、銀行強盗は能力者だつて。だから警察が手出し出来ないみたいで……ああせつかくの休暇があ」

弥々華と呼ばれた少女 茨田弥々華は口元にうつすらと二日月を描いた。黒いコートが翻る。小さな箱が落ち込みきつたリップの手に預けられた。

「分かつた。警察の案内頼むね。あと救急車も」

その言葉を残し、黒い風が銀行に突つ込んだのは数秒後。

「兄貴、終わりましたぜ！！」

安っぽいキャップにサングラス、真っ白いマスクといいういかにもな服装の痩せた男は見た目にたがわない安っぽい言葉を吐いた。

その手に握られたスチールケースを見た巨漢の男は下品な笑みを見せる。

「なら、ずらりかろうぜ。これでナスカ様にも顔向け出来 」

その言葉が最後まで語られる事は無かった。

「「なんだ！？」」

窓ガラスが割れる派手な音に2人は一斉にその場所を見た。

「何、能力者つてたつた2人？」

そこにいたのは小柄な少女だった。拍子抜けした表情が些かこの場には不釣り合いで。

「警察が出だし出来ないみたいだから、何がいるかと思つたけど…

少女は体についたガラス片を軽く払うと深紅とも言える真っ赤な瞳で男達を睨み付けた。

…

「たつた2人？」

小馬鹿にしたと思える表情に、男達の顔の青筋が立つ。

「ま、いいや。とつとと投降したら？ そっちの皆さんも、今助けますから」

弥々華は端の方で震える人質に軽く手を振った。人質は青ざめた顔で頷く。

「ふざけるなよ、小娘。俺たちに逆らうとどうなるか、思い知れ！  
！ 大地震碇！」

巨漢の男が手に呼び出せたのは巨大な碇。ぐるぐると頭上で振り回すと、碇を地面に打ちつける。

「うわ！？」

ぐらりと大地が揺れる。

弥々華は奇声を上げて地面に手を着いた。

「ヒヤハアアア！！」

痩せた男がそこにナイフを持つて突っ込んでいた。弥々華はそれを無言で眺める。

腰だめに構えたナイフが弥々華に突き刺さる瞬間だった。

「 ッ！！」

男の頭に弥々華の手が触れる。それを軸に回転。着地したときにはその姿は無い。

「黑白風華、発動」

巨漢の男の目に日本刀を構えた黒い影が映つた。

一閃。白刃が閃く。

「あ、が……」

男の足から噴き出す血。

さらに弥々華はたたみかける。地面に黑白風華を突き刺すと体重をそれに預ける。

右足と左膝。鮮やかとも言える回し蹴りが男を跳ね飛ばした。

「ひ……」

一方スースケースを握った男は思わず後ずさる。その時には既に弥

々華は肉薄していた。とつさに構えたナイフは1秒も持たず、手から離れる。

ナイフは既に弥々華の手の中にあつた。

投げナイフの要領で自分の足を縫い止められる。悲鳴をあげる間も無く、男の鳩尾に膝が突き刺さっていた。

「投降すりや良かつたのに……」

弥々華はなんの感情も籠もらぬ声で、昏倒した銀行強盗犯を見下ろしていた。

人垣がさつと退く。

弥々華はそれを静かに見ていた。

「あれ、能力者だよ……」

「怖え……俺達まで殺されんじゃねえ？」

「じろじろ見るなよ。殺されるぞ……」

「怖い……」

「気持ち悪いよな……」

特殊な力を持つた能力者は好まれず排他される傾向にある。社会的に存在を認められても、人間の繋がりからは煙たがられ嫌がられる。だがその事実は能力者が何を言つても変わらない。

下手に声を上げればマスクの餌食にされ、Resistanceと見なされるだけだ。

能力者至上主義を唱えるテロリスト集団の一員と。

だから静かな罵詈雑言にも弥々華は表情を変えなかつた。無言で歩く。人垣はそれに併せて隙間を作つた。

「弥々華！！」

警察を引き連れたリップが人垣を抜けた弥々華を抱き締めた。

「大丈夫？」

「平気だよ」

素っ気なく返事を返すと、リップの腕を軽く解き、弥々華は警察に視線を移す。

「あっちで犯人は寝てます」

警察が小走りで犯人確保に乗り出すの2人は見送った。

「弥々華、気にしちゃダメだよ。私達はResistanceとは違うんだからね」

人のいない方に歩き出した弥々華の背中を、リップは追いかける。「分かってるよー！」

弥々華は苛立つたような声で叫んだ。リップが僅かに身じろぐ。

「あたしは悪くない……よね」

立ち止まり吐き出した言葉に、自信は無い。

「悪くないよー！」

強く言い返したリップに弥々華はやっと笑顔を向けた。

「なら、いいや。忘れよ」

そう言って冷たい空を弥々華は見上げた。時だつた。

「あれ？」

「どうしたの？」

見間違ひだろうか、と弥々華は目をこすつた。何か赤い物が飛んでいたような気がする。赤い小さな生き物が。

【二コースをお伝えします】

蒼い髪の少年は何気なく付けたテレビをなんとなく聞いていた。バーを塗ったトーストを口にくわえたまま器用にコーヒーを入れて

いく。ミルクも砂糖も入れない。

【ソリア銀行で発生した強盗事件ですが、Apdscの協力により無事解決致しました。容疑者は能力者の男2人で、Res instanceと見て捜査が続けられています】

トーストを噛み碎き、コーヒーで流し込む。素つ気ない朝食を終えた少年はカップをシンクに置く。水を流し汚れた指先をさつと洗い流すと、テレビを消そうと視線を移した。

【臨時ニュースをお伝えします!! 先ほどお伝えした強盗事件ですが、容疑者2人が死亡しました。現場の小西さん】

画面が切り替わる。ここからあまり離れていない場所の銀行だ。アナウンサーは真っ青な顔でマイクを握っていた。

【……あ、魔……が、魔が現れて……殺されました】

よほどショックな事が起きたのだろう。小西と呼ばれたアナウンサーは声を震わせた。

【赤い魔が……人を……殺しました。本当に目の前で】

「赤い魔?」

少年の脳裏には自分の隊長の弟が浮かぶ。確かに赤いが……違うだろう。理由が思い付かない。赤という事で、腐れ縁の同僚の顔も浮かんだがそれも却下された。いくら馬鹿でも人殺しまではしない。テレビの画面ではスタジオで別のアナウンサーが謝罪を続けていた。少年 ティト イクスはわずかな寒気を覚えながら、テレビを消した。

To be continued

## Episode・2 朝焼けの邂逅（前書き）

すみません。内容を一部修正しました。映画のエンデロールに繋げ  
よつと思つたので、本文を少し変えました。

修正の詳しい中身については活動報告を「」覧下さい。

## Episode : 2 朝焼けの邂逅

「ティート起きてる？」

ノックも無く開いたドアを、ティートは軽く眺めやる。いや正しくはドアを開けた張本人であるリップを眺めていた。

「どうした？」

「コーヒーゼリー買つてきたけど、食べる？」

小さな箱を、リップは何気ない仕草で持ち上げた。

「もうう」

頷いたのは数秒後。

リップはいそいそと部屋に入ると、椅子に腰を下ろす。

「はい」

「おう」

リップは自分の分であるケーキを取り出し、ついていたプラスチックのスプーンで口に入れた。ティートもそれに倣つ。

「銀行強盗のニュース、見たか？」

何気なくティートが口を開いた。

「弥々華が犯人、ぼこぼこにしたってニュースなら知ってる。当事者だから」

「ああ……A passcoのつてあいつだつたのか」

ティートはどこか遠い目をすると、ゼリーを飲み込んだ。ちなみにクリームもガムシロップもかけていない。

「あの犯人、死んだらしい」

「弥々華がやつたの！？」

リップが身を乗り出したのを見て、ティートは首を横に振った。

「さあな。赤い悪魔が犯人だそうだ。アナウンサーが騒いでた。目の前で人が死んだと」

「赤い悪魔……でも弥々華は天使じゃないの？ それに弥々華がやつた時、周りにマスクミはいなかつたし」

「やうが」

ティトは小さなため息を漏らす。リップはスプーンを止めたまま、ティトを見た。

「で、あいつはどこにいるんだ?」

「弥々華なら」

「「めん」

無機質な機内に、不満げな色を含んだ謝罪が響く。  
世界は変わる。

ここは奥東京市、日向家地下。地球侵略を目論む惑星、ケロンから派遣されたケロロ小隊の秘密基地だ。そして現在、弥々華はケロロ小隊の旅客輸送機の中にいた。

薄紫の座席が並ぶ機内は、軍用機にも関わらず地球の旅客機にも負けない旅気分を醸し出していた。

そんな中、弥々華は一人申し訳無さそうな顔をして立っていた。それを見つめるいくつかの顔は、僅かな怒りと困惑に満ちている。

「遅刻とは、たるんどうぞ」

「ごめん、ちょっとトラブつって」

苦笑した弥々華に、赤い蛙似の一頭身 ギロロ伍長はため息を吐き出した。

「まあまあ、ギロロ。弥々華殿も事情があるんですね」

「そうだよ、伍長」

とつねにとりなしたのは、ケロロ軍曹と日向冬樹。ケロロは緑の蛙似、冬樹は温和そうな少年だ。

「ほり、弥々華殿。座つて座つて」

「うん」

弥々華は促されるまま、一番まえの席に腰を下ろす。隣は空席。

「よつしゃーーっ！ 行くありますよーーー！」

「楽しみだね、夏美ちゃん」

「はい……そうですね！！」

「はい、私も楽しみです」

「シオンも楽しみだと喜んでました」

後ろの席で楽しげな笑みを浮かべるのはサブローと口向夏美、東谷小雪と西澤桃華。夏美は赤毛を2つにまとめ、小雪は黒髪をボーネールに結っている。桃華は水色の髪を女性らしくショートに。なかなか対称的に可愛らしい3人だ。

一方のサブローは、白い髪に白い帽子。青い瞳が人間離れした格好良さを表していた。彼に見つめられた夏美の顔が真っ赤になつたのを見て、ギロロが苛立しげな表情を浮かべた。

「シオッチとテララに早くあいたいですう」

「拙者もでござる」

頷きあつのはタママー等兵とドロロ兵長。タママはおたまじやくしに、ドロロは青い蛙にそっくりな一等兵。

そんな2人が笑い合つのはなかなか微笑ましい。

【全員揃つたなあ】

【当機はまもなくフランスへ発進します。シートベルトを締めて下さい。つてゆーか、安全第一？】

運転手を務める事になつたクルル曹長とナビゲーターとなつたアンゴル＝モアの声が機内に響く。

「いざフランスへ！」

それがあわせるように椅子に立ち膝掛けの上に足を乗せたケロロが、発進に間に合わず後ろに転がつたのを見て小隊の面々はもれなく苦笑いを漏らしたのだった。

「向こうのフランス！？」

ティートはスプーンを片手に握りしめ、叫ぶように聞き返した。やや

こしいが、ティートは言いたいのは異世界のフランスと言ひことだ。

「そう。なんでもお友達の誕生日なんだって」

「暇人だな。にしてもこんな物騒な日に祝い事なんか出なくともいいんじやないかって気がするんだが」

「祝い事に出なくてもいいんじやなくて、こんな日に強盗を退治しちゃうほうが問題だと思つんだけど」

「そりや言えてる」

くくつとティートはシニカルな笑みを見せた。リップもつられて小さく笑う。

「でも、その赤い悪魔ってなんなんだろうね？ 能力者かな」

食べ終わつたケーキの包み紙をくるりと丸めたリップは、ゴミ箱にそれを放る。

「さあな」

ゴミ箱の隣でくたりとした包み紙からティートは視線を外す。

「オレにも良く分かんねえけど何かが起こる気がする。少なくとも、あいつには」

「ティート。心配してると？」

「まさか」

ティートは肩をすくめ、大仰におどけてみせた。

「オレの心配は巻き込まれるかどうかだけだ」

冷たいとも言える発言はティートの十八番だ。

「ゼリーご馳走さん。ほっぺになんかついてんぞ」

ティートはそう言ってリップに手を伸ばした。するりと頬に走るのは温かな感触。リップはうつすら片目を閉じる。

「甘え……」

ティートは指先に着いた生クリームを舐めとつた。こんな行為は珍し

くも無い。幼なじみとしては、だが。

「それじゃ、私部屋にいるね」

立ち上がりつたリップに、ティトは何気なく手を振った。

「おお」

今日、丸1日あるはずの休暇が残り数時間で終わりを告げる事を2人はまだ知らない。

フランス、パリ郊外。

ドラクーン家の邸宅は、今日も静かだった。

城とも言える邸宅のある部屋で1人の少女は寝返りを打った。青空を映したような水色の長い髪が揺れる。夜明けまでもう少しのこの時間、少女は深い眠りに落ちていた。

「彼女が当主か」

そんな静寂に、あるはずもない声が響いた。世界が1番暗くなる夜明け前にいて、なお色褪せない青年は少女に静かに手を伸ばした。

「起きろ、フェリシタシオン・ドゥ・ドラクーン」

肩を掴んだ男は力を入れず、ゆらゆらと少女を揺らす。

「フェリシタシオン」

されるがままに揺れていた少女は静かに薄目を開けた。儂げな銀灰色の瞳が見開かれる。

「だ……」

目覚めた事を確認した男は少女 フェリシタシオンの口を軽く塞いだ。

「静かに」

フェリシタシオン、シオンはしばらく視線をさまよわせていたが、観念したように頷いた。男は手を離す。

「あなたは誰なのですか？」

「俺が何者かという事は今はどうでもいい事だ」

男は、静かな銀色の瞳でシオンを見つめた。シオンは礼儀正しい姿勢で、ベッドに腰掛ける。

「お前はドラクーン家の当主か？」

「そうなのです」

「そうか。ではフェリシタシオン。お前に良い」と教えてやる」  
そこで言葉を切った。

「お前は何も教えてはいない」

シオンの頭に手を置いた男は、とても静かにそう言った。

「お前は救えなかつたんだよ。地球龍を」

「そんなはず、ないのです！！」

シオンは思わず立ち上がり叫んだ。

「私はテララを救つたのです！！ 桃華と一緒に！！」

「そうか、だが真実は違う」

ひゅつとシオンの喉がなる。男の眼はどこまでも冷静だ。

「真実は事実とは違う」

「嘘なのです……そんなの嘘なのです！！」

ベッドに崩れ落ちるように座つたシオンの瞳に薄い膜が張つた。今にも泣き出しそうな表情にも男は臆しない。

「泣くな、フェリシタシオン。お前は真実を知りたいとは思わないか？」

「真実……？」

「そうだ、真実を知りたくはないか？」

シオンはゆっくりと顔を上げた。

「私は……」

「私は？」

「私は助けられなかつた心の友がいるなら助けたいのです」  
シオンの瞳に静かな決意が宿つたのを、男は確かに見た。

「私は知りたいのです」

「ならば」

男の表情はそこでやつと変わった。男の顔に浮かんだのは冷たい笑み。

「今日の深夜0時に龍の書と地球龍の仔を連れて、この城で一番高い塔の部屋で待て。眞実とともに迎えに行く」

「はい！」

シオンの顔が鮮やかに輝いたのを見て、男は踵を返した。

「では、今日はこの辺で帰らせてもらひ。明日を楽しみにしているぞ、フェリシタシオン」

男は窓に向かつて歩き出した。

「待つて！！」

呼び止められた男は、足を止める。

「なんだ？」

「あなたは誰ですか？」

男はゆっくりと顔をシオンに向けた。

「俺はナスカ アンノウン。世界を変える指導者だ」

「ナスカ……」

「さよなら、フェリシタシオン」

窓ガラスが音も無く開いた。男、ナスカは足を窓枠に掛け勢いよく飛び出した。ナスカの姿が消える。

「ナスカ！！」

思わずシオンは窓に駆け寄った。地面を見下ろし、ため息を吐き出す。

「いい」

昇りだした朝日に照らされた庭園に、ナスカの姿はどこにもなかつた。

## Episode:3 happy birth day

身の丈2メートルを上回る男が、忙しない所作で廊下を駆ける。その額には、僅かな汗。

男は目当ての部屋の前にたどり着くと息つく間もなく、扉を開けた。

「フェリタシオン様！！」

男の視線の先の少女は、見ていた本からゆっくりと顔を上げると口を開いた。

「どうしたのですか？ ピエール」

「テラ？」

シオンの横で飛び跳ねていた小さな青い龍の仔は幼い所作で首を傾げた。かぶっていたベレー帽が少しづれる。

シオンはおもむろに片手を伸ばすと龍の仔の帽子を軽く直す。

「大丈夫？ テララ」

「うん。 大丈夫」

シオンにテララと呼ばれた龍の仔はにっこりとあざけない笑みを浮かべた。

「お客様です」

ピエールと呼ばれた男は一方部屋に入ると、胸に手を当てて腰を折つた。

その時だった。

「シオツチ！！」

「シオン殿！！」

飛び込んできたソプラノにシオンは思わず立ち上がる。

「まあ！！」

シオンの顔が、歓喜に輝く。

笑顔と驚きが混ざり合った表情で、シオンは駆け出したテララを抱き上げた。

そこは桃華にケロロ小隊と日向姉弟、小雪にモアと弥々華、クルル

の首根っこを掴んだサブローの姿があった。

「シオン殿、テララ！！ 見てみて、我輩とつておきのガンプラであります」

「僕からもプレゼントです！！ ハーラ味なんですよーーー」 簡単にリボンが掛けられたガンプラの箱を持ったケロロと、巨大とも言える大きさの飴玉を持ったタママが口を開いたのはほぼ同時。どちらが先に話しかめたか、2人はぐいぐいと押し合ひ。田つきと顔つきが悪くなつたのは氣のせいでは無いだろう。

「止めんか、情けない！！」

突如怒鳴つたのは静観していたギロロだった。耳元で叫ばれ、2人は同時に転げる。

「あのー、拙者が育てた花でござる」

2人より前に出るよつて、ドロロが足を進める。その手には柔らかく咲く一輪の花。

その様子を見ていたパートナー組は、思わず笑い出す。全員の手にはそれぞれ、思い思いのプレゼントが握られていた。

「シオン、テララ」

その中で桃華はきれいなピンクのバラを握り直すと、ゆっくりと駆け出す。

「お誕生日、おめでとうござりますーーー」

混じり気の無い純粹な笑みは、シオンとテララにまっすぐ届いた。

「ありがとう！！ 桃華」

シオンはそう微笑んで、駆け出す。この口が楽しい口だと疑わない。そんな顔をして。

テレビのニュースを耳に流したまま、リップは雑誌のページをめく

つっていた。何も起きない、退屈すら嬉しい時間。平和を噛み締めながら、リップはまたページをめくつた。

【 数ヶ月前から発生している、政治家連続殺人事件のニュースですが……】

リップはその言葉を聞いてなんとなしに顔を上げた。

「あー……この前の」

能力者を嫌い能力を使用禁止とする法案を発表した政治家や、能力者は人殺しだとマスコミに行つた政治家が数名殺された事件があつた。リップ自身が警護した政治家も　リップが任を解かれてからだが　殺されている。

ニュースはそれに関わる物だった。

【 警察は Resistance の犯行と見て捜査を進めてきましたが、ここで新たな事実が判明しました】

ニュースの画面が切り替わる。不鮮明なカラーの映像に、監視カメラと注が入る。

【まずはこの映像をご覧下さい】

リップの意識は雑誌からテレビにすっかり移つていた。  
その映像は普通の人なら作り物だと、笑うかも知れないくらい非現実的な物だった。

だがリップには息が止まるくらい現実的な物に見えた。

画面を横切つたのは赤紫色の物体。紺色の翼を広げじろりと監視カメラを眺めた。赤い角膜と緑色の瞳孔は不鮮明ながらもはつきりと分かる。

その生き物は右手をゆっくりと差し向けた。黒い何かが右手に収束するものが見える。

そこで映像は途切れた。

【いかがでしょうか？　これが現場の監視カメラが捉えた映像です。警察は、体の姿を変化させられる能力者が犯人と見て、捜査を】

「違う」

テレビに向かい、リップは言葉を吐き出した。

「違うよ……あれは能力者じゃない」「息が苦しく感じる。

「あれは」

確証は無い。だが吐き出せばにはいられなかつた。

「この世界の生き物じゃないよ」

リップの顔から表情が消え失せる。

そんな時だつた。

「ひあつ！！」

不意打ち氣味になつた電話に、リップは飛び上がつた。震えだした手で電話を取ると軽い深呼吸をし、通話ボタンを押した。

「はい、もしもし。リップ アドバンスです」

【任務だ、アドバンス。30分後に署長室へ来い】

「え……はい。分かりました」

リップがたどたどしい返答を聞く間も無く、電話は音を立てて切れた。

「怖つ……殺氣立つてる」

先ほどの映像とは違つた意味で、リップの顔から表情が消えた。

「赤い色は不吉の色……」

ことりと長く伸びた爪先で摘んだ積み木を小さな異形は積み上げた。

「赤い色は争いの色……」

歌う声は幼く、甲高い。

「僕は赤いよ、赤くて1人。赤くて不吉……争いは僕の元で……」

「アスス、いつまでその陰気な歌を歌う？」

アススと呼ばれた異形は、ゆっくりと首を回す。緑色の瞳孔、血のように赤い角膜がぐるりと回る。

「陰気ですか？ ジュエルさん」

赤紫色の頭が傾げられた。可愛らしい仕草とは反対の容姿に、ジュエルの眉間にシワが寄る。

「ああ、陰気だ。悲しいくらいに」

「そうですか？」

アススは悲しげに目を伏せた。

「僕には思い出せないんです」

「なにを？」

「シオンが生まれる前の僕達に歌つてくれた歌です。旋律しか、思い出せない。だからそれに歌を付けてみたんです。でも駄目ですか……」

アススの手に力が入つたせいか、持つていた積み木にひびが入る。「それもこれも、出来損ないのせいですけど。シオンの顔とか声とか……そこら辺の記憶全部持つて行かれましたから」パキンと小気味よい音を立て、積み木が砕けた。

「あーあ、壊れちゃった」

残念、とアススは肩をすくめた。

「でも、やつと逢えるんですね。シオンに」

もう一つ、アススは積み木をつまみ重ねる。

「逢えたら放さなくともいいんですね。ずっと僕の為だけのシオンでいてくれるんですよね」

幾分か興奮してきたのか、アススの口調が速まっていく。

「僕は死ぬまでシオンと一緒にいられるんですよ。あの出来損ないなんか殺してさ。邪魔をする奴もない方がいいですよね」

ふふふと静かに笑う。

「こんな情けない姿じやない。本当の僕の姿でシオンといたいんですよ、僕は。シオンは小さいから頭の上に乗せて、いろんな場所に行くんです。僕、見たい物がたくさんあるからシオンと一緒に見たんですよ」

早口でまくし立てるアススに、ジュエルは自分の肌に鳥肌が立つの

を感じていた。普通じゃないとジュエルの頭が警告を発する。  
「とにかく、今日が楽しみですよ。いや、明日かな? どちらだと  
思います?」

ニーニーと笑いながらアススはジュエルを見た。

「明日よ。計画は」

動搖を氣取られぬよう、ジュエルは呼吸を整えた。

To be continued

## Episode : 4 悪夢の始まり

「「」馳走さま。美味しかった」

弥々華はそう言って、フォークを無造作に置いた。無作法、ギリギリのその所在は弥々華の子供じみた横顔によく似合っている。

「我輩も……もう食べられないあります」

いまだ菓子にがつつくタママを横目にケロロはお腹を撫でた。

他の面々は既に出された菓子類を食べ終え、談笑を楽しんでいた。夕暮れのオレンジが包む庭で弥々華は紅茶を口にした。

「それでね、私達はテニスをしたんです。すっごく楽しかったんですよ」

「うわあ、いいな。私もやりたい」

夏美が少し斜め上を見ながら打った相槌にシオンはにっこりと笑う。

「では明日、一緒にやりませんか？」

「いいわね。ダブルスなんてどう？」

「賛成でーす！」

小雪が夏美にくつづいたまま返した返答に、サブローが吹き出す。

「面白そうだね。僕もやろうかな？」

「お……俺もやる」

サブローへの対抗意識を燃やしたであろうギロロに、吹き出したのは弥々華だ。

「明日は日向夏美争奪戦になりそうだねえ。クルルは誰が夏美のお相手を射止めると思つ？」

「サブローに300円」

間髪入れずに返ってきたのは安い賭け金。

「乗った。ギロロに100円」

「あ、我輩も賭ける。小雪殿に100円」

その言葉に弥々華は悪い笑みを小さく零す。

「賭け金増やすわ。200円」

「必ず払えよ」

「そつちこそ」

「ドロロ、ケロロ達、何してるの？」

くくくと笑う3人を興味津々と見つめるテラリード、ドロロはゆっくりと口を開いた。

「まだ知らないていいことじやねんよ」

さて、止めるべきか。

ドロロは3人をゆっくり眺めながら後の行動を思案した。

「始まりますね」

夜の帳が落ちた部屋で、アススは楽しげに微笑んだ。滲み出る喜悦。アススの手に握られたクレヨンがポロリと崩れる。手元に置かれた画用紙は、痛々しい戦いの絵が描かれていた。

弥々華は退屈な夜を過ごしていた。ベッドに腰掛けたまま退屈そうに頬杖を付いていた。背中ではモアの規則正しい寝息が聞こえてくる。

部屋割りはパートナー同士で振り分けられたのだが、弥々華とモアはパートナーが居ないため同室をあてがわれたのだ。

「寝れない……」

時差ぼけなどめったに来るようなタイプでは無いから、理由は恐らく神経が高ぶっているのだろう。人の家で無ければ、部屋から出る

のだが。

「暇だ」

起こせないように呟くと、体を真横に倒す。ぼすっと間抜けな音を立て、体が柔らかなマットレスに沈む、その時だった。

「シオン、どこ行くの？」

甘えるような舌足らずの声に、弥々華はピクリと反応する。

「真実を知りに行くのです」

シオンの声は緊張の色をはらんでいた。足音が速く、急いでいるのがドア越しに分かる。

弥々華は奇妙な胸騒ぎを感じ、体を起こすとドアにそつと歩み寄った。そつとドアを開けると頭を出す。見えたのは後ろ姿だった。テララの手を引き、小脇に分厚い本を抱えている。

「あれは……」

龍の書。別名龍の楽しい飼い方。

ケロロ小隊をドラゴンに変え、地球のエネルギーを吸い取る地球龍を生み出す元凶となつた本。それが龍の書に関する弥々華の見解だった。

「よし……」

シオンが廊下を曲がつたのを見て、弥々華も廊下に出た。後ろ手でそつとドアを閉めると、ゆっくり歩き出す。軽く浮かび足音を消し、弥々華は慣れない尾行を開始した。知りたい事は確かにあつた。時計の針は23時50分を指していた。

「自動運転セット完了」と……こしても、休暇中に任務なんて災難だよな

「そうだね」

何気ない調子で話しかけたティートは操縦桿から手を離す。雲よりも

上の高度を維持する輸送ドッグは静かに時間を遡っていた。

「ケロロ小隊もいねえし、オペレーターの娘くらいは残つてゐると思つたんだけど」

「モアさんの事？」

「確かに」

「向こうで会えるんじゃない？ 分からないけど」

そこでリップの声は途切れた。大きな欠伸が変わりに響く。

「リップ、眠いなら寝ていいぞ？ 免許無いんなら運転も変わ  
ねえだろ」「うう……」

ティートは軽く後ろを振り返る。同時に発せられた言葉に、リップは目をゆるりと細める。

「うん」

ところと柔らかな視線はいかにも眠たげな物。時差ぼけに近い物が来たのか、リップはふらふらっと頷く。口を開け、軽い欠伸。目を閉じた時には完全に眠りに落ちていた。

「すう……」

呼吸はすぐに規則正しくなる。ティートは自分の「トー」をリップの体に掛けた。椅子に持たれた頭が、かくりと垂れる。

その様子を見守っていたティートはそっとリップの頭に触れた。

「おやすみ」

誰にも見られる事の無いティートの横顔は驚く程に優しかった。

螺旋階段を上り詰めた弥々華はそつと木のドアの横に膝を付く。石造りのその廊下は、明かりが無く暗いがありがちな埃っぽさは全く無い。階段の量からかなり高い場所にいる事は分かるが、具体的な位置は分からなかつた。

部屋の中でシオンの荒い呼吸だけが聞こえた。

弥々華は耳を澄ませ、壁に背中を付けた。服と壁がこする音が小さく聞こえる。

「シオン」

部屋の中から小さな声がした。

「テララ、帰りたい」

「大丈夫よ。ナスカさんは優しい人なのですから」

不安そうなテララの声に続いた言葉に、弥々華の背中が泡立つた。

「私に真実を教えてくれるのですよ。きっといい人なのです」

弥々華はその言葉に弾かれたように立ち上がった。疑問は全て氷解していた。

ドアノブを回すと鍵が掛かっていた。

「チッ！」

舌打ちを一つ落とすと、少し距離を置く。

「黑白風華、発動」

振り上げた手。一閃された刀はドアを綺麗に切る。シオンは驚いたのか、呆然と目を見開いていた。

「シオン、アンタはナスカと関わってるのか？」

弥々華は黑白風華の切っ先を下げるときち着いた声で問い合わせた。ゆっくり歩み寄る。

「真実ってなんのことだ？」

そつとしゃがみこみ、視線を合わせた。

「死にたくないなら、教えて」

きつい声色。

弥々華の表情は硬い。

シオンはいまだ、良く分からぬといつ表情だった。

「私は助けにいくのです。真実を」

シオンはテララを抱き寄せるときち言つた。

「邪魔はしないで欲しいのです！－！」

シオンが叫んだ瞬間だった。

澄んだ金属の音が辺りに響く。

1回、2回……12回目の鐘が、鳴り終えた。

「そうだ。シオン」

男の声が、静かに響く。

そこにはいな男の声が。

弥々華は黑白風華の切つ先を上げ、ぐるりと辺りを見回す。

「眞実はお前を待ちわびている」

日付が変わった瞬間に空間が開いた。

「アンタは」

弥々華はシオンを庇うように立ち上がる。

「ナスカ！」

Resistanceを率いるその男の姿が、そこにあった。

「赤い色は争いの色」

満月が上る空に向かいアススは歌う。座つた屋根は冷たかった。

「僕は赤いよ、赤くて1人。赤くて不吉。争いは僕の元で……失う物は無い。僕はずつと1人……それが僕の運命だから」

伸びやかな歌声は夜の闇に響く。アススはそこで歌うのを止めた。

「さてお仕事の時間ですね」

アススはそう言つて立ち上がる。

「さあ来なさい、僕の兵士達」

アススの口が三日月のように裂ける。その笑みは深く、禍々しい。

その時だった。

アススの体からエネルギーが溢れ出す。

「命令です。シオンを守るもの全てを

地面が盛り上がり、人型を成す。

「

白骨化した腕が、地面から這い出す。

「殺せ」

アススの声に従つよつて、悪夢は田を覚ます。それは惨劇の始まり  
だった。

To be continued

## Episode・5 混沌の魔龍

「あんたは……ナスカ！！」

静かに笑う白銀の男に、弥々華は舌打ちした。と、同時に黑白風華を解除。背後に手を伸ばしシオンを抱え、テララの襟首を掴む。

「あ……」

「畜生ッ！！」

元ドアに、弥々華は突っ込んだ。階段に面した壁を支点に歩術を発動。小石を散らしながら階段を飛び降りる。

2人の悲鳴が線となり消えて行くのをナスカは無言で見守っていた。

「やはり逃げたか。だが想定内だ」

ナスカはゆっくりと耳に手を当てた。ヘッドセットが月明かりに揺れる。

「アスス、兵士を出せ。女神の器が巫女を連れて逃げ出した」

【もうやつてますか？】

間髪入れずに聞こえた返答に、ナスカは上を見上げた。

「分かつた」

ナスカは無線を切ると、しゃがみこんだ。床に無造作に落とされたのは龍の書を拾う。

「すぐに巫女を捕らえる。器は殺すな」

【分かりました】

ナスカは龍の書を軽く払つと、小脇に抱えた。

ギロロはベッドにあぐらをかき、辺りを見回した。

「むひ……」

眠れない。夏美は小雪の部屋に行つた。今は1人。眠れる状況であるはずではあつた。だが

「なんだこの胸騒ぎは……」

そうギロロが唸つた時だつた。

「ギロロ！－ 敵襲だ！－」

吹き飛んだドア。勢いづいたアルト。弥々華は肩で息をしながら駆け込んできた。

呆然とした表情で口を開けるギロロに、弥々華が口を開く。

「Resistanceが来てシオンがResistanceで真実とか言われ

「

「落ち着け！－」

弥々華はそこでやつと黙つた。赤い眼をまん丸に見開いて、ギロロを見た。

「まずは2人を下ろしたらどうだ？」

「あ、うん」

弥々華はシオンとテララをベッドにそつと下ろした。その横に腰を下ろす。

「シオン」

質問を始めた弥々華を横目に、ギロロは部屋を出た。通信機を持つてきていなかつた後悔をしながら。

「シオン、お願い。話して？」

視線がかち合う。

「私は地球龍を救えていないと言われたのです」

観念した。そんな調子でシオンは口を開いた。

「地球龍？ テララの事？」

シオンは俯いた。

「分かりません。ただ真実と共に迎えに行く、としか……」

弥々華はそれを聞きながらゆっくり立ち上がる。ふらりと離れ、ドアの方へと歩み寄つた。

「真実と共に、か。よく分かんないけど、とにかくアンタら2人は

Resistanceに渡せないよ

弥々華がそう言つたその瞬間だつた。

「あ……」

窓を指差したテララが固まる。2人はテララから窓に視線を移し、悲鳴を上げた。

「お化け！！」

茶色い巨大な何かが口を開けた。轟音が辺りを蹂躪する。

「あ……きやあああ！！！」

突如響き渡つた悲鳴に、弥々華の背筋が凍りついた。

「シオン！！　テララ！！」

「起きろ！！」

ギロロは自分の隊長を蹴り起こしながら、頭を必死に働かせていた。タママは既に廊下を駆けさせている。今頃はシオンの所に近付いているだろう。

クルルはとっくに活動を始めていた。既にResistanceの情報を収集中。

「敵襲だ！！　シオンが狙われている！！」

「ゲロ……てきしゅー？」

ケロロはそこでやつと田を開けた。

「え？　敵襲！？」

「そうだと言つてるだろ！！」

鈍い音。ケロロが頭を押さえてうずくまる。

「殴る事無いじゃん……」

「貴様以外はもう作戦を始めとるぞ」

じろりと睨まれ、ケロロは首をすくめた。

「冬樹殿と他のみんなは？」

「クルルの所だ。避難している」

「良かつたであります。で、てき」

次の瞬間、轟音が部屋を包み込む。2人は顔を見合わせ、叫んだ。

「シオン殿が危ない！！」

弥々華の田には空が見えた。大きな満月、漆黒の空。少し離れた場所に巨大な何かに握られぐつたりしたシオンとテララ。

弥々華が動き出そうと足を踏み出した瞬間だった。

「やつと捕まえた……」

笑い声だけが、闇夜を切り裂く。

「誰だ！？」

弥々華はそう言つて拳を振り上げた。

「隠れてないで出て来たらどうだ」

「隠れませんよ。僕はここにいます」

「弥々華殿！」

ケロロ達の呼び声にも、弥々華は応じなかつた。口を開けたまま呆然と上を見上げている。

「初めてまして」

月に、シルエットが重なる。それは悪魔にも魔物にも見える恐ろしい姿だつた。

「僕はアスス。混沌の魔龍です。シオンと出来損ないは頂きますよ」

そう言つてアススは笑つた。口が裂けたような、邪悪な笑みで。

クルルは凄まじい勢いでキーボードを叩いていた。

「何者だア……アイツ」

ディスプレイにはアススの姿。その周りにたくさんのウインドウが開く。

「敵性宇宙人、データ無し。異世界の原生生物か……？」

「クルル！」

「なんだ？ サブロー」

クルルはディスプレイから目を離さず返事を返す。

「ここから逃げた方がいいかも。死の舞踏でも始まつたみたいだよ？」

「今は現代だぜえ」

クルルは軽口を返しながら、舌打ち。パソコンを置み、立ち上がる。窓辺ではサブローと冬樹が、夏美と桃華にしがみつかれている。その隣では小雪が短刀を構えていた。

「なんだ？」

クルルは何気なく外を見て、柄にもなく絶句した。

「あれは……」

自分はファンタジーの世界にいつの間に飛んだのだろう？

クルルは思わず目をこする。

広い中庭。

そこは白い異形と茶色い巨体に埋め尽くされていた。

「あれは…骸骨とゴーレム？」

そこにいたのは古びた鎧を身に纏つた骸骨と、土塊の自動人形ゴーレムだった。

「待てであります！！」

ケロロはそう言つて、足を踏み出す。ケロロ小隊の残りの面々も武器を構えた。

弥々華も黑白風華を発動する。

「嫌ですねえ。抵抗しないで下さいよ」

困ったような顔でアススは肩をすくめた。

「僕が命令すれば、ここにいる人間なんてみんな殺せますよ。しかも自分で言つのもなんですが、結構強いんで。だからじつとしてて下さいね」

飄々とした調子でアススは言つ。まるでゲームの腕でも舐らしているような軽い口調だ。

「それに」

アススの飄々とした色が、消えた。

「シオンは僕の物だしね」

痛いほど真剣な瞳。

「じゃ、とりあえず任務完了ですね。帰ろうか、シオン」  
につこりと、先ほどとは打つて変わった笑みをアススは浮かべた。  
視線の先には完全に気絶したシオンがいる。

「あ、そうだ。言つて忘れてましたけど、あなた方」  
アススはくるりと振り返る。

「死んで下さいね。邪魔なんで」

刹那、屋敷に流れ込んで來るのは混沌の手先だった。

「まぢー……」

ティトは舌打ちする。手元には使い慣れないノートパソコン。

「赤い悪魔が始動した」

幾つもの反応に、寄つたのは眉間のシワ。ティートは叫び出したい衝動をこらえ、操縦桿を握る。

「クソ……事態が事態だ。さめに見ててくれよ、宇宙警察……」法定速度を軽く超えるようにエンジンを動かす。

「つー……んう？」

掛かつた負荷。リップは息苦しさに目を覚ました。

「……ティート？」

「起きたか。リップ、緊急事態。赤い悪魔が動き出した。弥々華も多分一緒だ」

その言葉に、リップは息を飲んだ。

「嘘……」

「最悪な事にResistanceの反応もあり。意味分かるな？」その言葉にリップはこつくりと頷いた。

「なら、モニタリング頼む。もつすぐ着くぞ。目醒ましとけ。多分戦場に突っ込む」

「分かったよ」

リップは素早く頷くと、ノートパソコンに飛びついた。

To be continued

桃華は思わず窓枠から身を乗り出した。

「そんな……」

「西澤さん…… 危ないよ……」

「本当に落ちますよ……」

モアと冬樹は必死で桃華の体を押さえつけた。それほど桃華の体は外に飛び出していた。

「嘘…… シオン……」

確かに、見えた気がしたのだ。茶色に埋もれた綺麗な水色の髪が。

「クルル、来たよ……」

サブローがその時、切羽詰まつた声を上げる。冬樹は首を回し、固まつた。

「うわあつ……！」

瞬間、ドアが圧迫に耐えきれず音を立てて吹っ飛んだ。

「グルル……」

白骨死体の呻き声が、全員にまつきり聞こえた。

「来ただ！」やる……！」

しがりを取つていったドロロの声が響く。

廊下に溢れるのは、氣味の悪い沢山の骸骨だ。うすら埃を被つた甲冑が不気味さを際立てる。

「やるしか無いだろ？」「う

ギロロは咳きやま、銃の引き金を引く。やがて呼び出した手榴弾のピンを引き抜いた。

廊下に転がった手榴弾は爆発。その爆風をドロロが突っ切る。ギロロも全力で駆け出した。

「弥々華殿！！」

「分かつてる」

ケロロはドロロを横目に、弥々華に指示を飛ばした。弥々華の体が舞い上がる。窓枠の残骸を蹴り、飛び出すは外。

「行かせません」

「それはこっちのセリフですぅ！！」

方向を変えたアススに、タママのインパクトが激突した。

「連れてかせるかあツ！！」

鈍重な足音を立てるゴーレムの肩に弥々華の足がピタリとくっつく。2歩踏み込むと、体はまた宙に舞い上がった。

腕を狙う斬撃。

「シオン！！」

重力に任せた落下。腕は無回転で地面に落ちる。シオンとテララも。

「危つぶね」

地面ギリギリで弥々華は2人を受け止めた。足が痺れ体が崩れた。地面に衝突。完全に気絶した2人の重みが直に腹に掛かり、弥々華の意識も一瞬落ちそうになる。

「弥々華殿！！」

「シオツチー！ テララー！」

ケロロ達が飛んできたのが横目に見えた。背中の飛行ユニットを畳むと着地。タママはテララを、ケロロはシオンを抱えた。

「気持ち悪……」

弥々華はそう呻くと立ち上がる。ゴーレムはその間も斬られた断面

を虚ろな目で見ていた。土塊の吐息に、弥々華は黑白風華を腰だめに構え直した。

「ゴーレム、何をしてるんです」

突然響いた高慢な声に、全員が振り向いた。

「え！ なんで……生きてるんですかあ！？」

タママが素つ頓狂な声を上げる。全員の目には、こちらを睥睨するアススの姿があつた。

「殺す気ならもつと本氣で撃つべきだと思いますよ。殺意はしつかりと感じましたが」

淡々とアススは言い放つ。

「さあ、行きなさいゴーレム。早くシオンを取り返せ」  
振り上げたアススの右腕に、ゴーレムが呼応する。  
断面に土が集まり、再生した腕が振り上がった。

落ちてきた腕に、受け止めた弥々華の両腕がギリギリと悲鳴を上げた。だが弥々華は拮抗を崩せない。汗が頬を伝う。  
ゴーレムの右腕を弥々華は必死で受け止めていた。後ろには4人。月明かりの下、弥々華の目が赤く輝いた。

「風華招来！」

斜めに引くと同時に吹き出した衝撃波が、ゴーレムの腕を2つに引き裂く。

呆然とする2人を余所に、弥々華は飛び上がった。

「これでどうだっ！！」

ゴーレムの頭部に黑白風華が食い込む。

「風華繚乱！！」

土塊が飛び、頭が四散する。

首の無い胴体はゆらゆらと揺れる。

弥々華の頬にうつすらと笑みが浮かんだ、瞬間だった。

「危ない！！」

2つの高音がきれいに重なる。

その時、弥々華の体は凄まじい勢いで吹き飛んだ。

「弥々華殿！…」

「軍曹さん！…」

タママは思わずケロロに飛びついた。

左腕と下半身しか残らないゴーレムは、その強腕を振りかざす。

万事休す……。

2人の頭にそんな言葉がよぎった時だった。

【させるかあツ！…】

歪に拡声された大音声が響く。エンジン音が響き渡り、緑の機体がゴーレムに突っ込んだ。ガリガリと音を立てて、ゴーレムは少しつつ土に還っていく。

「な……」

ケロロは無意識に口を開く。タママに至っては声も出せない位、驚いていた。

「誰でありますか？」

ケロロ小隊の輸送ドッグ。庭に突っ込んだ深緑の機体に、ケロロは恐る恐る声を掛けた。

数秒後、地面にめり込みかなり悲惨なへこみ方をしている機体が音を立てて開いた。

「あ、べっこべこ……」

飛び出したのは縁のツインテール。黒いコートには少なからず見覚えがある。

「もしかして……リップ殿？」

ツインテールはぐるぐると辺りを見回し、未だ啞然とするケロロと視線をかち合わせた。

「ケロロさん、無事ですか？」

「無事でありますか……なんでここに？」

「援軍ですよ」

返事を返したのはリップではなく、青い髪の少年だった。

「ティート曹長？」

今度はタママが、名前を呼ぶ。

「説明は後で。今は戦闘が先。でしょ？」

ティートはそう言って殊勝な笑みを見せた。

「夏美ちゃん、これ使って……」

サブローは紙飛行機を夏美の頭に当てる。その間にも小雪が敵を破壊していく。

「ありがとうございます！」

夏美の声がわずかに弾んだ。その体にはクリーム色を基調としたパワードスース。

夏美は髪飾りからビームサーベルを抜き放つと、骸骨を甲冑<sup>こう</sup>とぶつた斬る。

その時だった。

廊下に響いた爆発音。

「無事でいじめるか……」

「無事か？」

ドロロとギロロの大声が、そしてその姿が2人に見える。

「ギロロ、何があったの？」

「俺にも分からん。ただシオンが狙われている」

語尾に合わせ、引き金を引いた。

「シオン……」

部屋の端で小さな悲鳴が聞こえた。

「シオンが狙われてるって……なんで、なんでシオンが？」

「落ち着いて、西澤さん。きっと軍曹達がなんとかしてくれるよ」

そう、言つた時だった。

「なんとか出来ると思つていいのか？　お前達は」

鋼の声に、全員が振り返る。

「あなたは……？」

白銀の髪が、月明かりに流れる。後ろで響き渡る轟音が、凄まじい。端正な微笑みが冷たく揺れる。

「ナスカ　アンノウン。巫女を戴きに来た  
ナスカの右腕がゆるりと構えられた。

「革命家だ」

「伏せろ！！」

ギロロは思わず、叫んだ。

その瞬間、銃声が辺りに響き渡った。

「ナイス……」

弥々華は壁にめり込んだ体を引っ張り起こしながら小さく呻いた。  
突然援軍が突っ込んでくるとは、気持ち良く予想外だ。  
軽く瓦礫を払い、辺りを見回す。舌打ちは無意識に出た。

「ナスカか」

空に浮いたまま、腕を構えている。

「まずい！！」

青ざめた時には遅かつた。

銃声が辺りに響き渡る。

全身が冷たくなるのを弥々華は、はつきりと感じた。

「あなた方は誰ですか？」

そう言つてアススはゆっくりと高度を下げる。

「オレはティート イクス。お前は連續殺人犯の『赤い悪魔』。違うか？」

アススの表情は変わらない。

「否定はしませんよ」

アススはそう言つて地面に降り立つ。

「オレの住む世界の警察からの依頼だ。お前を捕獲する」

「そんな事、出来るんですか？」

小馬鹿にした顔で微笑んだアススに、ティートは苛立たしげな表情で応じた。

「やるぞ」

ティートは両手を突き出すと、後ろをちらりと顧みた。既にリップは4人の保護に入つたらしい。

「龍炎翔苛、発動」

ティートの両手に蒼い炎が宿つた。

「行くぜ」

To be continued

## Episode・7 双龍、動く

蒼炎が闇を切り裂く。

「食らえツ！！」

アススは動かない。

「防げ」

炎を塞いだのは土の手。地面から現れたゴーレムの手が、炎を握り潰す。

ティトは、駆け出した。

ゴーレムの手を蹴り真後ろに飛び降りる。

「火龍演舞」

左手に宿る炎が形を成す。蒼龍はいくつも頭を増やし、アススに殺到した。

「焼け死ね」

距離は0に等しい。

ティトは宣告は確信に近かつた。

ナスカの背中に生えた鋼鉄の翼が月明かりを跳ね返す。

ナスカは右手であつた銃を構えたまま、ククと笑つた。

「民間人の癖に、大した反射神経だな」

冬樹は呆然と、頬を抑えた。流れ出したのは鮮血。

「う……うわあああ！！」

「冬樹！！」

夏美は思わず冬樹に駆け寄ると抱き締める。桃華は呆然と腰を抜かしていた。

「貴様、なんのつもりだ！！ 無関係な民間人に手を出すとは、ギロ口の怒声にも、ナスカは表情1つ変えない。

その時だった。

黒い風が、走る。

ナスカの白銀の瞳が静かに動いた。

「今で『ジザル！』

「ああ……」

飛び込んだのはドロロ。ギロ口は銃を構える。照準は頭。ナスカは両手を刃に変えると2人の斬撃を軽くはじいた。同時に仰け反る。更に蹴り。

ドロロは紙一重でかわしたが、弥々華はもうに受け、吹き飛ぶ。

「だつ！？」

鈍い音を立て、部屋の中に落ちる。弥々華は目を瞬かせ、肩を抑えた。

「何故民間人に手を出したか……簡単だ」

ナスカは部屋を見下ろし、口角を上げた。

「時間合わせだ。ただのな」

「あなたもそれなりにやるみたいですが、甘いですね」

ペロリとアススは自分の爪を舐めどる。月明かりに輝く鋭利なそれは、血に濡れていた。

「爪だけで相殺か」

ティトは大きく跳ぶと距離を上げた。左腕に刻まれた傷が、焼けるように痛い。低い呻き声を上げたティトに、アススはフンと鼻を鳴らした。

その時だった。

「アスス」

その声に、アススは振り向いた。

「時間切れだ。やれ」

ナスカの声にアススは肩をすくめた。

「もう、せっかく良いとこ」だつたのに

子供のようなその声はすぐに冷静さを取り戻す。

「仕方ありませんね」

アススの口が限界を越えて開いた刹那、筆舌尽くしがたい音が世界に広がった。

限界を超えた音が響く。

耳を塞ぐ間も無い。

「やあ……」

リップは思わず耳を塞ぎ、悲鳴を上げた。周りでケロロとタママがのたうち回っているのがはつきりと見えた。シオンとテララは意識を失つたままだが、顔は僅かに歪んでいた。

ピキリと音が響いたのはその時だった。

符により張られたバリアが割れる。ガラス片に似たそれは、地面に落ち散らばる。

その時、白骨化した腕が青に触れた。

「もういい

その声で、アススの咆哮は止んだ。ナスカは顔色を変えず、当たりを睥睨する。

弥々華はその視線を、気絶寸前の虚ろな目で眺めていた。

「帰るぞ」

「でも誰も殺つてませんよ」

平然と口を開いたアススに、ナスカは静かな視線を向けた。

「用件は全て片付いた。彼らの抹殺は後でも構わない。理解したな

「……分かりました」

アススは苛ついたような口調で返すと、骸骨に優しく抱きとめられたシオンとテララを見下ろした。

「まあいいか。さ、帰りましょう。シオン」

空間が開き、閉じるのを弥々華は静かに眺めていた。

世界に静寂が戻る。

死屍累々と言つべき現実に、弥々華の気分は沈んでいった。

ミシミシと建物が軋む音がした。もしもこの城が近代建築であれば、音の直撃で木つ端微塵になつていただろう。ガラスというガラスが散乱した床を眺めながら、弥々華はため息を吐き出した。

「ともかく無事で何よりであります」

ケロロは俯いたまま、口を開いた。

「はい……」

ピエールの横顔に刻まれた深い悔恨に、弥々華も視線を逸らす。

深夜2時。あの強大な咆哮　さしづめ魔龍の咆哮と言つべきかによるショックから抜け出した全員は、自然と客間に集まつていた。

シオンがさらわれた。

最後に近くにいたリップがそう言つたとき、桃華は嗚咽を漏らした。

ピエールは青ざめ、頭を垂れた。

他の面々も青ざめた顔で、黙り込んだ。

静寂だけが、辺りを支配した。

「……ケロロ軍曹」

口火を切つたのはティートだった。

「相談があるんですが」

突如名指しされたケロロが、小さく体を震わせ頭を上げた。

他の面々もそれに続く。

「なんでありますか？」

「オレ達は赤い魔羅……アススを追いかけます。あなた方はあの少女とそのお友達を探す。違いますか？」

「その通りであります」

ケロロが頷いたのを見て、ティートは息を吸い込んだ。

「だつたら、共同戦線を結びませんか？」

「共同戦線……でありますか？」

ティートは軽く頷く。

「今回の事件、Resistanceが糸を引いてた。それは分かれますよね。そしてオレ達には、悔しいけどResistanceの正確な位置が分からぬ。いつも後手後手になつてゐるんです。だけど、あなた方が力を貸してくれればなんとかなるかも知れない」

ティートの頭が下がる。

「頼みます」

「あたしからも、お願ひ」

ティートは田を見開いて弥々華を見た。

「隊長」

ケロロは数秒、田を見ると後ろを見た。

「えつと……どうしよう?」

「好きにしろ」

間髪入れずにギロロの返事が返ってくる。

タママとドロロが頷いたのを見て、ケロロは正面を見た。

「じゃあ……よろしくであります。ティト曹長」「伸ばされた手を、ティトはしっかりと握り返した。

同時刻。ケロン軍中央母艦・グランドスター。そこに務める軍人達は、突如現れた侵入者になすすべも無かつた。

「エリア突破！！ 障壁、破られました！！」

「部隊全滅！！ 新規部隊を投入します」

青ざめる通信兵の1人が、突如叫んだ。

「奴ら、生物研究室に向かっています！ 目的は……」

中央統制室は水を打つたように、静まり返った。

「記憶洗浄装置です」

モニターに映つた3人の男女 地球人の男女が巨大な装置と共に消えるのを、通信兵達はなすすべなく見つめていた。

「大佐！！」

奥に座る男は、ゆっくりと頷いた。

「A p d s c o、リドアイル・キース大尉を召集」

通信兵は呆然と、男を眺めた。

「……了解」

半分地面に埋まり使えなくなつた輸送ドックを捨て、一行は行くと  
きに使つた輸送機に乗り込んだ。日本に戻る為に。  
もしもの時の為と空間を越えて使える携帯電話を置いて、輸送機は  
飛び立つた。

地球人組は眠つてゐる。

起きているかも知れないが、少なくとも弥々華にはそう見えた。

「お前も寝ろよ」

その言葉に弥々華は顔を上げた。

「ティート。運転はいいの？」

熟睡中のケロロとタママ、武器の整理中のギロロ、パソコンの修理  
中のクルルに変わり、運転していたティートが現れた事に、弥々華は  
少し驚いた。

「今は自動運転中だ、バカ」

素つ気ない罵倒に、弥々華は軽く睨む。

「それより、何があつた？」

「なにが？」

まだ睨んだままの弥々華に、ティートは頭を軽く小突いた。

「オレ達が来るまでに」

弥々華は小突かれた場所を軽く撫でていたが、ため息を吐き出した。

「説明する」

「置長」

深夜にもかかわらず仕事に励んでいたキースは、パソコンから視線  
をずらした。

「なんだ」

「ケロン軍から、召集命令が」

「ケロン軍！？」

声がひっくり返ったのにも、秘書は驚かなかつた。

「何故だ？」

「Resistance の襲撃だと、と

「Resistance？」

キースはキーをいくつか叩くと、立ち上がつた。

「分かった。すぐに行く」

To be continued

## Episode : 8 願いし瀧瀬

「孤独の砦……紅青2つの魂は……僕が望むは……2人だけの」何かが聞こえた気がして、シオンは目を開けた。

薄暗い照明、灰色の天井。

うつすら聞こえるのは機械的な唸り。エンジンのような音が響いていた。それに混じるのは、歌声。シオンはゆっくりと体を起こした。窓からの逆光でシルエットしか見えない影がそこにいた。

「誰なのですか？」

シオンの僅かにかすれた声は、歌声の主に届いたらしい。それは、静かに振り向いた。

「目が覚めたんですね、シオン！！」

太陽が影に隠れる。

シオンはハッと口を抑えた。

「初めてまして、僕はアスス。シオン、あなたにずっと逢いたかった」その姿に、シオンは絶句した。ぎょろりとした瞳、裂けた口、鋭い爪。不気味を通り越し、いつそ禍々しいと言えるその姿に。

「ああーまだ繋がらない」

Apdsc0、弥々華の自室。がりがりと頭を搔いた弥々華は乱暴に電源キーを押した。

ふと見えた床にケロン人+人間が9人も入ると部屋も狭いな、と考えたのは現実逃避なのだろう。

ちなみにここにいないクルルは、Apdsc0にある探査機を用いてResistanceの居所を探っている。もちろんキーは無

許可で。リップとティートはクルルの見張りをあてがわれた。

「署長室にもいなかつたんでありましょう」

ケロロはそう言つて、弥々華に笑いかける。疲れたような笑顔に、  
弥々華はため息を吐き出した。

「うん。全く、どこ行つたんだろ。めつたに出掛ける人じやないの  
に……」

戦闘準備をする面々を眺めながら、弥々華は首を傾げた。

ガシガシと頭を搔くと、弥々華は握っていた携帯電話に視線を戻す。

「出で下さいよ、署長」

祈ると叫うには軽い口調で、弥々華はまた携帯を耳に当てる。

アススはシオンの姿を焼き付けるように、ゆっくりと体を眺めた。  
そしてその視線が顔に行き当たった時、アススの視線は不穏な何か  
を孕んだ。

「嬉しくないみたいですね」

アススが足を進める。シオンは思わず、身をすくめた。

「なぜですか？ 僕があの出来損ないのように、愛玩するに相応しくない姿だからですか？」

足取りは変わらない。だが言葉には強さが増し、視線は冷たい物に  
変わっていく。

「そんな……事」

シオンの舌がもつれる。

アススはそれを聞いて、嫌悪の表情を深くした。

「シオン、僕はね」

アススの足が止まる。

その特異な瞳がシオンを捕らえた。

「あなたよりずっとつらい地獄、深い闇の中にいたんですよ」

穏やかな口調だった。

「あの出来損ないのせいでの」

アススの目はシオンを見ていた。だがアススの心は、シオンでは無い誰かを見ていた。

「怖かった。静かで暗くて、一人だった。そんなの、もう嫌なんです」

アススは俯く。

「アスス」

その姿に、シオンはあの光景が浮かんだ。両親が死んだ日、龍の書から聞こえた声。それと同じ響きが、アススの声にはあった。

「ごめんね」

今度はアススが目を見開く番だった。温かな体温が伝わる。

「シオン？」

抱き寄せられた。そう気付くまでに、アススはしばらくの時間を要した。

「ごめんね、アスス。ごめんね……」

シオンの涙が頬を伝う。

アススは棒立ちのまま、事実を理解出来ないでいた。

「シオン？ なんで、泣いてるの？」

アススは知識を必死でひっくり返す。でも、分からない。理解出来ないのだ。なぜ自分が抱き寄せられているのか、なぜシオンは泣いているのか。

この膠着状態はしばらくの間、続いた。

ノックの音に、全員の動きが止まる。弥々華は携帯から田を離すと

軽快に立ち上がった。放り出された携帯は未だに繋がらない。

「あ、クルル。見つかった？」

ドアを開けた弥々華の口調は軽い。

「まあな」

クルルと後ろに付くリップとティードが入ると、部屋はぎゅうぎゅう詰めのおしくらまんじゅうになる。いわゆる、すし詰め状態に弥々華の眉間にシワがよつた。

クルルは弥々華とケロロ、冬樹が座るベッドの上に座るとノートパソコンを開いた。

「あ、これ探査装置の？」

口を開いたのは弥々華だった。Appasocoの研究所がある階にある馬鹿でかい機械が弥々華の頭に浮かぶ。エネルギーのサンプルを入れればそれがサンプルと同じエネルギーの居場所がコード化されて出て来るという代物だ。

「あれ、でもこれResistanceには意味なかつた気がするんだけど……」

「追つたのはテララのエネルギーだ。能力者が感知出来なくともあれだけのエネルギーだぜ？ 追えるに決まってるだろ」

「なるほど」

「で、テララとシオン殿の居場所は？」

ケロロが弥々華の後ろから顔を出す。弥々華はひょいとケロロを持ち上げると自分の前に座らせた。他の面々もディスプレイに顔を近づける。

「ここだ」

クルルは探査装置の画像に衛星写真を重ねる。

「ゲロ？ ここは……？」

ディスプレイには一面の青。そこに浮かぶ赤い点。

「この赤い点がテララのエネルギー。そして、ここは」

クルルは拡大された写真をズームアウトしていく。

「大西洋のど真ん中だ」

「シオン、泣かないで」

アススは手を伸ばす。

数少ない知識で体を動かす。

「お願い」

短い左腕をアススはシオンに回した。右手はシオンの頭に触れる。傷つけないように優しく頭を撫でた。

「アスス」

シオンは嗚咽混じりに口を開いた。

「待つてあげられなくて、『ごめんね……』

「シオン」

アススの腕に僅かだが力がこもった。

「会えて、良かつた」

シオンが絞り出した言葉。

それはアススが待ち望んだ言葉だつた。

「シオン。僕もだよ」

くすりと、アススは笑う。

「もう離さない。シオンは僕の物だ」

夕焼けが2人を照らす。アススの瞳が怪しく輝いたのはその性だつたかも知れない。

「シャドウ

薄暗い部屋。べたついた黒髪の男が振り返る。

「首尾良く行つたようですが。流石ナスカ様」

シャドウは陰気に笑うと、本をめくる手を止めた。

「あの計画の進行は理解に苦しますが、ね

「<sup>われわれ</sup>能力者を優位にする為には新たな偶像が必要だろ? それより

それの解説はどうだ?」

「不可能です。少なくともワタシには

シャドウの手には龍の書が無造作な状態で開かれていた。

「ワタシは言語学者じゃありませんから。巫女のガキに読ませては

？」

シャドウは本を閉じるなり、悲鳴を上げた。どうやら指を挟んだらしい。

「忌々しい……」

その言葉にナスカはため息を吐き出した。

「馬鹿な事をするな。それをよこせ」

「それは失礼

未だに苛立つた声のシャドウは、テーブルのように影を構築。龍の書を置くと、ナスカへそれを送る。

ナスカはそれを受け取ると、無言で部屋を立ち去った。部屋には機械音だけが、残された。

To be continued

## Episode・9 出撃の狼煙

その男はケロン軍本部の近未来的な廊下にそぐわない、シンプルなスーツを身に纏っていた。

「キース少佐」

「ああ、今行く」

キースは首に手をやりネクタイを締め直すと、軽く目の前のドアをノックした。

「失礼致します。大佐」

そこは、何もない広い部屋だった。窓の外は漆黒の闇。宇宙を眺めるその男 大佐 はゆっくりと振り向いた。

「ご足労感謝する、キース少佐」

その表情は光のせいか、伺うことは出来ない。だがその威圧感に、

キースの表情がわずかな強張りを見せた。

「いえ、お気になさらず」

キースは軽く一礼すると、顔を上げた。

「して、ご用件は？」

大佐はキースの顔をちらりと見ると、自分の周りに浮かんでいた光学ディスプレイを一枚飛ばす。

キースはそれを片手に受け取ると、すらりと目を通した。

「これは……」

「記憶清浄装置が盗まれた。Resistanceの手によつて、ディスプレイの不明瞭な映像。そこに記録されていたのは、Resistanceの月とジュエル、そして中途半端に姿を変えているミラーの姿だった。

「それで、我々は何をすれば？」

キースはディスプレイを返すと、胸に手を当て問うた。その表情に先ほどの強張りは無い。

「装置を取り返せ。ガルル小隊を貸そう

「了解致しました」

敬礼は指先まで神経が行き届いた物。大佐は窓から視線を逸らすと、たつた一言を放った。

「幸運を」

一方こちらは弥々華の自室。人口密度の高い部屋で、弥々華はケロ口の頭越しにディスプレイを凝視する。

「大西洋のド真ん中あ？」

信用していない訳ではない物の、出たのは怪訝な声だった。

「空間コードは？」

ティートの声に、クルルはキー ボードを操作する。

「K - 66」

「隊長達の世界だよ、確か」

弥々華の答えに、ティートが頷く。

「場所はどこになる？」

ギロロの問いに、クルルはまた操作を始めた。

衛星写真は分かりやすい地図に変えられ、ゆっくりとズームアウトしていく。離れると分かったのは、点の場所はアイルランド及びイギリスから1500kmくらいの場所であることだ。

「近くに島も無いでござるな」

「もしかして、また海の底ですか？」

タママが呟いた言葉に、弥々華は苦笑する。

「だったら嫌だなあ。もう海底はこりごりだよ」

先日の事件を思い出したのか、弥々華は額を抑えた。うつすらまだ残る傷跡を。

「それは無いと思つぜえ」

「なんですか？」

クルルは陰気に笑うと、地図の点を指差した。

「よく見てみろよ」

額がくつつく。その表現が比喩では無いくらい、全員が顔を寄せる。

「あっ！」

弥々華は思わず声を上げた。

「動いてる……この点、少しずつ動いてる」

その点は確かにわずかながらヨーラシア大陸に向かい、移動していた。

「その通り。奴らは乗り物に乗ってるんじゃねえの。で、この進路の延長線にあるもの、なんだ？」

赤い点から伸びた線が指示するもの。それは

「モン・サン＝ミシェル」

呟いたのは、冬樹と桃華だった。

「始まりの場所か」

弥々華は呟くと、ケロロの頭に顎を付けた。

「Resistance……何を企んでる？」

その言葉は呻き声に近かつた。静寂が、ふつと辺りを満たす。

その時だった。

不意に静寂を破ったのは、特大のサイレン。

「ゲロ！？」

「ギャツ！？」

「うわつ！？」

「なんだ!? 敵襲か！！」

「すみません、オレです」

飛び上がったケロロのせいで舌を噛んだらしい弥々華が恨めしい口つきでティートを見た。

「ティートオー」

無表情のティートはなんの反応も寄越さず、外へ出た。

その手には携帯電話。

サイレンは着信音だつたらしく、未だにけたたましい音を立てている。

「あのヤロ」

「まあまあ、ティートもわざとじやないし。ね？」

「そうで、いざるよ」

今にもティートを追い掛けようとする弥々華をリップとドロロロがとらなす。

そこにティートは戻つて来た。

「で、誰からだつたの？」

「署長からだ。別枠で仕事が入つた。今からそつちに行く

「別枠？」

ギロロが上げた視線を、ティートは真つ向から受ける。

「ガルル小隊としての任務ですよ」

「カツコつけめ……」

すつと口角を上げ冷めた笑みを浮かべるティートに、弥々華は小さく毒づいた。

「なんだよ、文句あるのか？ ともかく急を要するみたいだからそつちに行く。何かあつたら連絡くれ」

そう言ってティートはリップの肩を叩いた。

「分かつた。気を付けてね」

ティートは頷くと、軽く会釈を残し退室した。

その様子に全員は顔を揃つて見合せた。

「仕事ねえ。まあとにかく今は氣にしてる暇無いか」

弥々華はそう言って腕を組んだ。

「で、これからどうする？」

「決まつてるぜえ～……」

クルルは陰気な笑みを浮かべると、キーボードを叩いていく。

「Resistanceの裏をかく」

クルルはそう言つと、手を止めた。

「Resistanceの空間転移装置にハッキングをかけて、A

pdscの装置と繋げる。あとは総員で攻め込み、シオンとテララを奪還。その後は素早くここに帰還し、回線を切る  
その発案は賭けにも等しかつた。

### ガルル小隊、作戦会議室。

そこにキースはいた。四角くまとまつたテーブルの、上座に当たる席から見渡すのはガルル小隊の面々だ。

「お久しぶりですね。キース少佐」

「ああ。イクスの入隊以来だな」

紫紺のケロン人は、その金色に光る目をキースに向かた。

当のティトは机の端に座り、不機嫌な表情を向けていた。水色のケロン人タルルとオレンジのケロン人オタマトロロはどうしたものかと顔を見合させていた。

「まあ良い。それでは作戦会議を始める」

キースはそう言い放つと、トロロに目配せをした。

「新兵」

「ブブ、りょーかい」

トロロは手元のコンソールを弄り、会議テーブルの真ん中に立体画像を呼び出した。

「Resistanceがやらかした空間転移の残留反応を追った結果、3人の行き先が分かつた」

キースはそう言うと立体画像の一つに触れる。映像はきれいな球体になると、地球の姿を模倣する。

「空間コードK-66のこと、大西洋の真ん中に奴らはいる」

「罠では無いのでしょうか?」

ガルルの怪訝な顔にもキースは動じない。

「Resistanceの残留反応を数年追いかけていたが、ここまで鮮明な反応は初めてだ。誘われているのかもしれない。だが、我々の目的はあくまで装置の奪還だ」

キースの目は揺るがない。

「理解して頂けたかな？」

「ええ」

2つの視線が、静かに交錯する。

「では作戦を発表する」

キースの声は、奢り無き冷静なものだった。

「上手く行くのかなあ」

リップはそう言つと、コートのボタンを締め直す。

「Resistanceにハツキングなんて、通じると思う?」

「クルルがハツキングで負けた所、1回しか見たこと無いから通じるでしょ」

弥々華は靴紐を縛りながら、そう笑つた。

「信じてるんだね、クルルさんの事」

「当たり前」

弥々華は腰を上げると、爪先を地面に軽く打ちつけた。

「弥々華殿、リップ殿。準備出来たありますか?」

リップの部屋のドアをノックしたケロロの声に、弥々華は頷いた。

「待つて隊長、今行く」

空間転移装置のある部屋には、ケロロ小隊とパートナー陣が既に揃っていた。

「ごめん、遅くなつた」

「気にするな」

ギロロに言われ、弥々華は軽く頭を搔いた。

「それじゃ、役割を確認するでありますよ」

ケロロは静かな声で全員の注意を引く。

「ギロロと弥々華殿はその火力と破壊力を持つて囮になつて欲しいであります。弥々華殿は絶対に捕まらないように。ギロロ、しっかりと守るでありますよ」

「ああ」

「り……了解」

さらりと返事を返すギロロとは対照的に、弥々華の顔は苦虫を噛み潰したそれであつた。

「次、ドロロには隠密に単独潜入を頼みたいであります。なんかあつたら頼むでありますよ」

「承知」

ドロロは、既に「アサシンモード」に入ったのか。その瞳は冷たい絶対零度の色を湛えていた。

「最後、タママー等とクルルは我輩と一緒に3人の後に潜入。シオン殿とテララを探すであります。クルルは向こうで帰る時にハツキング掛けなきやならないでありますから、怪我しちゃダメでありますよお」

「分かつてるぜえ、隊長」

「了解ですう」

クルルは不機嫌に唸り、タママは機嫌よく頷いた。

「クルル。装置を起動するでありますー！」

「了解だぜえ、ポチッと」

クルルがエンターキーを押すと、空間転移装置が勢いよく起動する。

「それじゃケロロ小隊全員出撃であります」

「「「「「おおーーーッ！…！」」」」

ケロロが振り上げた拳に追随するよつこ、小隊員も拳を突き上げる。

「軍曹、必ず帰ってきてね」

「シオンとテララを頼みます」

冬樹と桃華の願いは、彼らの背中に確実に届いていた。

To be continued

## Episode: 10 思惑

「もうすぐ、会えるんだな。ナスカ」  
小綺麗に整えられた執務室に、ナスカの声が響いた。  
写真立てに釘付けになつたその目に迷いは無い。

「愛している」

そう言つてナスカは写真立てを取つた。そこには少年が2人と、1人の少女が写っていた。

「永遠に」

「ナスカ様！！」

駆け込んできた女に、ナスカは目を剥いた。

「なんの様だ？ ジュエル」

「空間転移装置が、ハックされました」

「どこからだ？」

ナスカはそう言つと、写真立てを机に置いた。

「A p d s c oからです」

その言葉をジュエルが発した瞬間だった。壁に掛けられた電話が、勢い良く音を立てた。

「こちらジユエル」

つかつかと歩み寄つたジュエルは受話器を取るなり表情を沈めた。

「了解した」

「どうした？」

「ナスカ様、申し上げます。敵襲です。A p d s c oからの」

「たわつ……」

空間の隙間と言える無重力を抜けた先は、灰色の世界だった。よろけた弥々華は1歩足を踏み出すと、ふらつきながら着地する。床は金属の様で、カンという耳障りな音がした。

「ここは……」

小さめのコントナが積まれたこの部屋は倉庫なのだろうと田測を付けた、その瞬間だった。

「弥々華殿危ないッ！！」

「へ？」

そう言つて弥々華が振り返ると、視界を満たしたのは一面の縁。  
「ぎや！」

「タマツ！？」

「どわ！？」

「くーっくーっく……大丈夫かあ？」

その後飛び出したのは黒・赤・黄色。約5kg×4の重みに、弥々華は頭から倒れ込む。

「あ痛つつう……勢い付けて飛び出すな！！ バカ」  
したたかに打つた後頭部を抑えた弥々華が、腹立たしげに怒鳴った。

「弥々華殿、あまり騒ぐのは……」

持ち前の反射神経で弥々華の隣に着地したドロロを、弥々華はギッと睨みつけた。

「分かつ

「誰かそこにいるのが？」

やばい……！ 弥々華はぴたりと固まるときを殺してコントナにへばりつく。他の面々も無意識に同じ行動を取つた。ドロロだけは無言かつ無音で、どこかへと姿を消したが、誰も気付く事は無かつた。

「来るな来るな来るなあ……」

弥々華は膝を付く格好で、吐息に混ぜた呟きを漏らす。近付いてくる男の手に黒光りする何かが握られているのを見て、タママは息を

呑んだ。

「銃だ……」

「弥々華」

タママの弦きに、ギロロは口を開く。

「出るぞ」

「了解、黑白風華発動」

ギロロは銃を、弥々華は黑白風華をそれぞれ握り締めた。そのまま飛び出すとカンカンと軽い音を響かせた弥々華に、ギロロが追随した。

「クルル、タママ。我輩達も行くでありますよ」

「ああ」

「了解ですう」

軽い音が離れていくのを聞きながら、3人は反対方向へと歩き出した。

ブンと蛍光灯が唸る。

シオンは膝を付いたまま、アススを固く抱きしめている。

温かい、初めての感覚。

アススはようやくその心地よい温かさにうつすら微睡んでいた事を知った。

「アスス、大丈夫ですか？」

「え？ ええ、僕は平氣です。どうやら眠ってしまったみたいですから」

アススはシオンから、ちらと視線を逸らした。照れたような表情に、シオンは僅かに笑い立ち上がった。自分が先ほどまで眠っていたベッドに腰掛けると、隣にアススを座らせた。

「アスス、一つ聞きたい事があるのです

「なんですか？」

「テララはどこなのですか？」

その言葉を聞いた瞬間、アススから表情が抜け落ちた。指先には力がこもり震え出す。

「アスス？」

「なんでもありませんよ。僕は出来損ないの居場所なんて知りません」

その返事は素つ気ない。そのままアススはベッドから飛び降りた。「ナスカ様の所へ行きます。出来損ないの処遇を確認しなければ」「処遇……」

その響きに平和的な響きは無い。シオンは思わず息を詰めた。

「シオンは大人しく待っていて下さい。すぐに帰つてくるから

軽くパタパタと手を降つたアススは、素早くドアを締めた。と同時に鍵の掛かる音が響き、静寂が部屋を満たす。

「テララ……」

シオンは小さく咳くと、ベッドの上で一人膝を抱えた。

「なるほどな」

ナスカはジュエルの報告を聞き、一人頷いた。

「お前と月は奴らを探せ。民間兵を船内に配備。巫女は部屋から出ずな。シャドウはモニタリングルームで船内の監視。逐一情報は俺に入れるように。あとアススは巫女を見張らせろ。ミラーには命令を出すな。奴は自由に動かしたい」

「了解致しました」

一息で指示を終えたナスカに、ジュエルは軽く一礼を返す。

「そうだ、ジユエル」

立ち去る寸と踵を返したジユエルはすぐに動きを止めた。

「なんでしょうか?」

「クルル曹長をお招きしろと伝える

「……」

ジユエルは思わず静止した。

その発言は意外すぎた。

「こちら側に引き込むのですか?」

「ああ」

間髪入れず、返事は返る。

「彼は有能だ」

「……了解致しました」

今度こそ、ジユエルは会釈を残し退室した。

男は震える手で銃を構えながら、周囲を見回す。背中に伝わるのは  
静かな恐怖に、視線が泳ぐ。鉄の床に足音が反響する。その時だつ  
た。

カン!!

軽やかにコンテナが鳴る。

残響する足音を切り裂いたのは、黒いコートの人間だった。  
男は小さな悲鳴を上げた。

取り落としそうになつた銃を持ち上げ、必死に構える。

その瞬間一筋の銃声が、男の銃を弾いた。銃がくるくると弧を描く。  
刹那、ヒヤリとした感覚が首筋を伝つた。黒いコートの人間は赤い

瞳でこちらを射抜く。

首に突きつけられた日本刀が嫌に不釣り合いだ。

「……どこにいる？」

弥々華の押し殺した声は僅かに殺氣を帯びていた。

「先ほどここに1人、女の子が連れてこられた筈だ。どこにいる？」  
男はその少女を知っていた。こここの前をナスカ様に抱えられながら通つた、美少女。

「……あ、あっち……行つた」

弥々華は瞬間、怪訝な顔をしたがすっと刃を男から離す。

「ありがとう」

そう言つと、男の鳩尾に日本刀の柄を突き刺す。

「が……！？」

男の腰が崩れ落ちる。さらに首に伝つた衝撃が、男の意識を完璧に落とす。

男はそのまま、昏倒した。

「やるう」

弥々華が茶化したように呟くと、ギロロは小さくため息を漏らす。  
目の前には昏倒した男。

弥々華はその男の襟首を掴むと、ずるずると壁に立てかけた。  
たくさん足音が廊下に響くのが聞こえる。バレたのだろう。強攻策だったから。

「さて、じゃいっちょ派手にいくとしますか？」

「アンテナの積まれた倉庫を抜けると、そこは広い廊下だった。床は金属製、無機質なそこにケロロは肩をすくめた。

「寒いでありますな」

足元から上の冷気が厄介だと、ケロロはため息を吐き出した。

「本当にひんやりしますよねえ」

タマタも体を軽く抱き締め、ケロロの後を付いて歩く。寒くは無いが体に良いものでは無いだろう。背筋までがぞくぞくとする。

「で、これからどうするでありますか?」

ケロロが見る廊下はかなり長く続いていた。距離にすれば200mあるか無いか。そこに一定の感覚を開け、ドアがびっしり付いている。

「片つ端から開けるにしても、敵に見つかったら終わりですよ?」「でありますよなあ」

ケロロはがりがりと頭を搔ぐ。ドアは少なくとも50のはくだらないだろう。

「どうしよ? クルル」

ケロロは目を潤ませ、くるりとクルルに向直った。

「ククシ……任せな、隊長」

クルルは相変わらずの笑みを浮かべると、ゆるりと立ち止まった。ぴこんと伸びたアンテナがしばらぐ、くるくると動く。

「スキン完了だぜえ。モア! アドバンス! 聞こえるか?」

【はい、クルルさん。よく聞こえます。てゆーか、通信快調?】

【同じくです】

ヘッドホンから響いた2つの高音に、クルルは眉を潜めた。単純に

苦手なタイプの声が響いたからだ。

「今から地図を送る。テララの居場所を補足しin」

硝煙の匂いと銃声が、瞬間に溢れた。廊下に飛び出した影に男達は発砲する。

「やつたか……」

男が発した言葉は1秒も無く覆された。

煙の散った廊下の端から飛び出したら、薄桃色の光線。問答無用で眉間を穿つそれに、血が溢れる。

それでも残った男達は必死に銃を構え直した、瞬間だった。

飛び出した黒い影。

光線の隙間を縫うように距離を詰めた黒い風は、男達につつすりと静かな視線を向けた。

斬られ、蹴られ。

風が過ぎ去ると同時に、男達はぐつたりと倒れた。血溜まりが床を濡らす。

弥々華は無言で止まると、ゆっくりと振り返る。そこには1人の男がふらつきながら立ち上がった。

「先には行」

その瞬間、銃声が響く。

「すまんな

平静を保つたその低音に、今度は弥々華が息を飲む。

「大丈夫か？」

「ごめん

返り血を拭つた弥々華はギロロから視線を逸らし、死体を眺めた。血を流したそれに感情を持たぬように、弥々華は息を吐き出す。

「あーら、派手にやらかしたのねえ」

甘つたるい声が響いたのは、その瞬間だった。弥々華はゆっくりと振り返る。

さらりと伸びた紫髪、官能的な顔立ち、チャイナドレスから伸びる肢体はどこまでも美しい。その表情がどこまでも嗜虐的なものでなければ、その美しさは完璧と言えただろう。

「久しぶりね、天使のお嬢ちゃん。その御方は初めましてかしら？」

弥々華は全身の血液が逆流するような感覚に襲われた。

「ああそうね。初めましてなら名乗らなくちゃダメね」

女は弥々華の意志など知らずペラペラと口を閉じなかつた。

「私は月 李雷よ。あなた方を殺しに来たの」

そういうつて月は真っ赤な唇を片側だけ歪ませた。

「楽しませて頂戴ね」

弥々華はぎりと唇を噛むと、黑白風華を構え直す。ギロロも銃を構え直すと、月に照準を合わせた。

「短期決戦で決めるぞ。行けるか？」

「出来るか怪しいけど、やってみる」

廊下に視線をさまよわせていた弥々華は、軽く息を止めた。

「行くぞ！！」

ギロロが出した声に押し出されるように、弥々華は加速する。地面に這わせた黑白風華が、火花と耳障りな音を立てた。

爆音が聞こえたのは気のせいでは無いだろうが、ケロロ達にはそれに関わる余裕など無かつた。

【そこを左です】

モアの指示に従い廊下を進む。廊下には不自然なほど人気は無い。ケロロ達は壁に張り付くと、曲がる箇の角をゆっくりと覗き込んだ。やはり、誰もいない。

ケロロ達は角を曲がると、また歩き出す。

【そこから5つ田の扉、右側です】

「いこだな」

クルルはそう言つと、そのドアをじっくりと眺めた。鉄製の扉が頑強だ。アナログな鍵でも掛かつていれば開けられるかはかなり怪しいだろう。ハッキングが掛けられるような物なら一瞬だが。そんな事をクルルが考へているとは知らないケロロは、かなり無造作にドアに手を伸ばした。

「……あ

軽い音を立てて、ドアが開く。

「開いたでありますよ」

ケロロは氣まずそうに、呟いた。

「紫電雷光、発動！！」

その声は戦場にいるとは思えないほどに、官能的だった。

「さあ、来なさいお嬢ちゃん！！」

「風華」

弥々華は加速を止めずに黑白風華を振り上げる。ギロロは後ろから、大量の銃火器を構えた。

「招来！！！」

弥々華は足首でストップバーを掛けると、黑白風華を力いっぱい振り下ろす。ギロロは無言で銃火器の引き金を引いた。

弥々華の横を小型のミサイルがすり抜けた。

弥々華はバック転で後方に距離を取ると、呼吸を整えた。

「やつたか」

「いや……」

ギロロの咳きに、弥々華は小声で応じた。

「まだだね」

爆煙が晴れる。

「そうよ」

その瞬間、ひどく艶めかしい声が響いた。

「まだ、何も楽しくないもの」

弥々華の髪の毛が静電気でも帶びたように逆立つ。

「なんだ……？」

「まずい！！」

「悲鳴を聞かせなさい」

次の瞬間、紫色の光が2人の視界を満たした。

「……？」

そこはそれなりに広い部屋だった。赤い絨毯が敷き詰められた床、白いクロスが掛けられたテーブル、豪奢な作りの椅子。

古い屋敷の食事室、とでも言えばいいような部屋はケロロ達に理解を与えなかつた。

「よつこそ、クルル曹長」

声が響いたのはその瞬間だつた。

「クッ？」

クルルはほんの一瞬、面食らつた顔をしたもののがふつと笑みを浮かべる。

「初めまして、と言つべきか？ ナスカ アンノウン」

部屋の奥に設えられた小さな扉。そこから現れたナスカに、ケロロ

とタママは息を飲む。

「抵抗はするな。そもそもこれを持つて」

「テララ！！」

淡々とした口調とは反対に、ナスカの手に握られた物は衝撃的な物だった。

ナスカはテララの入った小さな檻を大きなテーブルに置いた。テララは眠っているのか、ピクリとも動かない。

「座れ」

3人は従わざるを得なかつた。

それはあつといつまの出来事だつた。とつさにギロロを抱えた弥々華が飛んだのだ。

壁にぶつかるような形で緊急回避。格好悪いが、まだ生きている。「避けるの？ ならもつと足搔いてみたら！？」

月はエキセントリックな笑みを浮かべると、小さな電撃の塊を繰り出す。ギロロを抱えたままの弥々華は、全力疾走で天井を蹴つた。さらに床を蹴り、一気に駆け出す。

「ギロロ！」

「なんだ？」

「逃げるよ！」「

「何を言つてる？」

月の脇をすり抜けた弥々華は、ギロロの返事を聞かずに駆けた。歩術で一気に距離を開ける。

月はそれを、至極残念と言つた表情で眺めていた。  
小さい背中は既に見えない。

「ジュエルー、逃げられたんだけど」

髪の毛を軽くかきあげた月の耳に光る物、それは小型通信機だ。  
「知つてゐる。想定通りだ。構わない」

ジユエルの落ち着いた声音が、月の耳朵を揺らす。

「シャドウの所へ戻れ。後は私がやる」

「何ですって？」

月は小さく呻いた。

「手を引けと行っている」

「嫌よ」

月の返事は、明らかに拒絶の色を帯びていた。

「あの赤いおちびさん、気に入ったの。私が壊したいわ」

数秒、沈黙が落ちる。

「ならば、構わない。好きにしろ。私は器を捕らえる」

「感謝するわ、ジユエル」

月はそう言って妖艶な笑みを見せた。通信が切れるのを聞いて、さらには言葉を紡ぐ。

「楽しみ、ね」

To be continued

## Episode : 12 動き出す眞実

弥々華はひたすら狭い廊下を駆けていた。

廊下の角をいくつか曲がると立ち止まり、ギロ口を床に下ろした。

「なぜ逃げた?」

壁にもたれて息を乱す弥々華を、ギロ口は見上げた。

「あれはやばいから」

弥々華は荒い呼吸の中小さく呟いた。

「相性も悪いんだけど、それ以上にさ

「アンタが……」

それは突然の事だった。

弥々華はがばと頭上を見上げると、慌てて周囲を見回した。

「どうした?」

ギロ口は手持ちの銃を構えると、弥々華の顔を見る。

「いや……」

自信を失つたように、弥々華は呟いた。

「なんでも

「後ろの部屋」

「なんだ!?

今度は弥々華にも理解出来た。

声が鮮明に響く。

「今何か聞こえなかつた!?

「なんの話だ?」

ギロ口の怪訝な顔に、弥々華は目を見開いた。

「声だよ!! 女の人の声」

背筋が凍るほど儂ぐ、それでいて強さを秘めたアルト。先ほど響いた声はそんな物だった。

「何も聞こえんかったぞ? あまりふざけるな

ギロ口の刺々しい聲音に、弥々華は小さく唸つた。

「本当だつて……」

弥々華の咳きは、そこで流された。何気なく後ろに手を伸ばすと、冷たい何かが指に触れた。

「ん？」

「どうした？　また何か聞こえるのか？」

「違うよ。ドアだつたんだ。この壁」

場違いと思える古風なドアノブが付いたドア。弥々華はそのドアノブを力強く捻つた。

「おい！――」

「声が本当なら……ここになにかあるはずだ」

弥々華はそう言つてドアを勢いよく開けた。

「安心しろ。眠っているだけだ」

ナスカは軽くテララの眠る檻を顎でしゃくつた。向かい合つケロロ達はじつとそれを眺めていたが、クルルは一人視線をそらす。

「ナスカ アンノウン」

「なんだ？」

クルルの厳めしい声にタママは小さく身を震わせた。その声は酷く冷静に不機嫌で、関わりたく無いこと請け合ひの声だつた。

「俺をなぜ呼んだ？」

その声にナスカは初めて表情を崩した。

「ミラーから聞いていなかつたのか？」

すうと形の良い口元が笑みを形作る。その表情にクルルはケツと息を吐き出した。

「『我々は君に田を付けている』か？」

思い出すだけでも苦々しかつた。海底都市での出来事は。

一般スタッフに紛れていたミリマーに気付くことも出来ず、利用され、おめおめと逃げられたのだ。

「その通りだ」

ナスカは相変わらずの表情で、立ち上がった。

「お前を科学者として採用したい」

それは命令に等しかつた。

「クルル、お前は空間学を除いた全ての科学のスペシャリストだと聞いた。そして今までの交戦の間、お前の力は見せて貰つたよ。全く素晴らしい」

「お褒めの言葉をどうも」

素つ気ないどころか喜びの欠片も無いクルルの声にも関わらずナスカの弁舌は止まらなかつた。

「お前が望むもの全てをやる。地位も権力も……望みとあらば世界でもくれてやる」

ナスカは椅子にかけ直すと、クルルのレンズ越しの瞳をじっと眺めた。

「だから、我々の計画に協力しろ。お前がいれば、我々の計画も容易い」

「ククッ……」

クルルは静かに笑みを見せた。その表情はケ口口にも読み取れない何かがあつた。

「1つ聞きてえ」

「なんだ?」

「なぜ弥々華に固執する?」

ナスカの眉がぴくりと動く。

クルルはそれを見て、また薄笑いを見せた。

そこは広い執務室だつた。

大きな机が中央に置かれ、その他にはなにもない殺風景な部屋だつた。

弥々華はおもむろに周囲を見回すとある一点に視線が釘付けられた。

「どうした？」

弥々華は何も言わず、歩き出した。机の前で立ち止まると、小さな何かを手に取る。

「なんで……」

ギロ口は弥々華に歩み寄ると、それに視線を移した。

「写真立てか。それがどうかしたのか？」

弥々華の体の震えに、ギロ口気が付いた。

「あたしがいる」

写真立てが指先から滑り落ちる。ギロ口は慌ててそれを取ると、中の写真を見て愕然とした。

「……これは」

そこにいたのは、満面の笑みを浮かべた弥々華と幼さを残したナスカ、そして黒髪の少年が写っていた。

「……ナスカ＝アリシア・オーヴラック」

ナスカが口にしたのは、名前だつた。その言葉には隠しきれないやりきれなさと愛情が滲む。眉間によつたシワは、さらに深まつた。

「殺された少女の名前だ。彼女は能力者が差別される世界の犠牲者だ」

ぐっと握られた手、その瞳には寂しげな色が刻まれた。

「だが、だ。そんな悲劇の犠牲者が生き返ればどうなる？」

「出来るわけねえだろ」

「それが出来るんだよ、お前達の技術があればな」

ナスカはそう言って、ケロロに視線を移した。クルルは小さく舌打ちを漏らす。

「クローン、記憶操作による人格の改竄……心当たりはあるだろ？」

口元に刻まれたのは深い笑み。ケロロにはそれが、ひどくグロテスクに感じられた。

「どこまで知っているありますか？」

「全てとは言えないが、ね。負の遺産キルル、隊長の素質、ドラコノケロン……幾つか調べさせてもらつたよ」

ケロロは自分に向けられた視線から目を逸らした。

「さあ、話題のすり替えはここまでだ。クルル。俺達と共に歩け。来い」

「……ククツ」

クルルは椅子にだらしなくもたれると、やる気のない笑い声を上げる。深く垂れた頭は表情が読み取れなかつた。

「悪くねえな……」

「クルル！？」

ケロロはぐるりと首を振った。その目は明らかに驚きが浮かぶ。

「ナスカ・アンノウン。俺はな……」

その言葉を遮ったのは、一筋の銃声。クルルはただ笑っていた。

弥々華は完全に座り込むと、呆けた表情でギロロを眺めていた。

「大丈夫か？」

「……腰、抜けた」

ふふと、弥々華は乾いた笑みを浮かべる。

「ごめん、びっくりしちゃって」

ギロロはため息を吐き出すと、頭を搔く。

「驚かない方がおかしいと思うが？」

「だよね」

弥々華はそう言って、ギロロの手から写真を抜き取った。

「あ、これやつぱりあたしじゃないよ」

写真を数秒凝視すると、指先で少女を指差した。

「黒目、黒いから」

指された虹彩は、確かに深い黒だった。一方弥々華の虹彩は言いつまでもなく赤い。

「ああ、そうだな……って何してる?..」

ギロロは突っ込みをいられずにはいられなかつた。当の弥々華は写真立ての裏蓋を取り外すと写真を抜き取つていた。

「App scoに持つて帰つて調べてもらおうと思つて。能力者なら顔写真とか残つてるかも知れないし」

弥々華は裏蓋を外し終えると、小さな声を上げた。

「『ナスカ A オーヴラック・ジェイン グレイ・リドアイル  
キース。1998.8.23』」

乱雑な字が記すのは、名前と日付だつた。

「リドアイル キースって署長の名前だつて、確か。なんでナスカと一緒に笑つてんだろ?..」

弥々華がそう呻いた瞬間だつた。

「こんな所に潜り込んでいたのね?..」

色氣ある声が空気を揺らす。

弥々華は弾かれたように立ち上がると、勢いづいて振り返る。

「見つけた」

ギロロは銃を構えると、開け放たれたドアにもたれる月を睨み付けた。

「なんのつもりだ？」

椅子の上でのけぞつたままのナスカは静かに口を開いた。服には穴があき、胸への被弾を物語っている。

「クークツクツク」

クルルは相変わらず笑いながら、手に握ったブラスターをくるくると回した。

「俺はな、隊長以外に従うつもりはねえんでなあ

「クルル！」

ケロロは目を潤ませ、うんうんと頷いた。

「今だ、ガキ！！」

「分かつてますう！！」

タママは素早く頷くと、テララの檻に飛びついた。すぐにそれを素早く持ち上げる。

「あばよ、ナスカ・アンノウン」

そう言って、クルルは立ち上がる。その表情は一種の嘲笑が浮かんでいた。

ケロロも慌てて立ち上がり3人の後に続き部屋を出た、その瞬間だつた。

「ナスカ様？」

突如として響いた声に、ナスカは頭を上げた。

「……大丈夫ですか？」

現れた真紅に、ナスカは平然と体を起こす。

「アススカ。巫女は？」

「今は落ち着いています」

「そうか」

ナスカは淡々と頷くと、すっと胸に触れた。ひやりとした金属が指

に伝わる。

「アスス、奴らを追え。龍の仔に逃げられた」「分かりましたけど、なにがありましたか？」

「さしたる事ではない。行け」

アススは口を尖らせたが、軽く首肯した。

「分かりました」

To be continued

「見つけた」

甘つたるい声が、わずかに微笑んだ。緊迫した空気には不釣り合いな声に、弥々華はチッと息を吐き出した。

「戦う？」

「しかないだろうな」

弥々華は黑白風華を自分に引き寄せると、息を吸い込む。  
「しゃあない。援護頼むよ！…」

そう言つて弥々華は勢い良く地を蹴つた。

「お嬢ちゃん、あなたに興味は無くなつたんだけど……」

弥々華は無視を決め込んだ。

「風華」

ギロロは銃口を円に向けたまま、照準を合わせる。

「招来！…」

銃声が混じり合つ。

「まだまだ！」

さらに地面に足を着けた弥々華は、また1歩踏み出す。黑白風華を引くと、軽く引き寄せた。

さらにもう一度踏み出すと同時に、黑白風華を突き出す。肉を貫く感覚は、確かにあつた。

「ゲロ～！！」

ケロロの絶叫が、廊下の静寂を切り裂く。ケロロ一行はとにかく全力疾走を強いられていた。

「ヤバいって…… クルル撃っちゃうんだもん

「つるせえな。じゃねーとアンタら全滅だつただろ? が

クルルは息を切らしながら呻いた。内勤の体力の無さに舌打ちが漏れる。

その時だった。

「軍曹さん後ろ! ……」

タママの叫び声にケロロは振り向き、絶句した。

「うつそー……」

視線の先で、翼が空を裂いた。

悪魔の形相で追いかけてきたのは、アスス。

「止まれ!! さもなくば命の保証はしませんよ

「ど、止まれと言われて止まる馬鹿はいないあります!!」

ケロロの足が加速する。テララの入った檻を抱いだタママは、アススをちらりと見た。

「軍曹さん! …… テララを頼むですぅ」

「タマ…… ゲロ! ?」

タママは檻をケロロに投げ渡すと、ぐるりと振り向いた。

「ここは僕が相手ですぅ!! 軍曹さんと曹長さんは早く!」

投げられた檻に姿勢を崩したケロロはクルルと視線を合わせ、2人頷いた。

「すまないであります。タママ!」

ケロロはよろりと檻を抱いで立ち上ると、走り出す。

「待ちなさい!!」

「ここから先には行かせないです!」

タママは軽く飛び上ると、目一杯息を吸い込んだ。

「タママインパクト! ……」

ぐらりと刃の体が傾ぐ。

つゝと肩から溢れた血が地面に伝つた。

「ふふ……」

僅かだが零れた笑いに、弥々華とギロロは刃を剥いた。

「成長はしてるみたいね」

黑白風華の軌道をずらすため添えられた右手が、弥々華の腕を握り締める。

「でも、甘いわ」

パチリと何かが弾ける音がした。

「あ……」

刹那、溢れ出した電流に弥々華は絶叫した。

「刀は電気を通す。なんでそんなことに気付かないのかしら」

そう言つた月は、黑白風華を引き抜いた。血が溢れる。弥々華は黑白風華を握り締めたまま、崩れ落ちる。

「まあいいわ、邪魔者は消えた。そろそろあなたの悲鳴も聞かせて欲しいものね」

「悲鳴だと？」

ギロロの声が瞬間、冷ややかなそれに変わった。鋼鉄に似たその声に、月の口角がつり上がる。

「黙れ、三下」

その言葉と同時に、ギロロの虹彩が色を変える。灰色に染め上がつた虹彩は無音で月を射抜いた。

「素晴らしいわ。その声、悲鳴に変えたくなる

月の笑みは深まる。

「弱い癖に刃向かわないで下さいよ……」

うんざり、その一言がふさわしい口調でアススは呟いた。

視線の先のタママは、肩で息を切らせている。

「たかがエネルギーの塊に僕が対応出来ないと思つたんですか？」  
タママが放つたインパクト。それをアススが何らかの手段で無効化したのは数秒前の事だ。

「それならあツ」

タママの頭は瞬間的に切り替わる。地を蹴つて距離を離すと息を吸い込む。

「みんなの嫉妬を僕に分けてくれですぅ」

ドスの利いた声に瞳が血走る。

力を込めた右手に収束する力は負の感情、嫉妬であり妬みであり嫉そねみ。

「嫉妬玉！」

自分の頭程に大きくなつたエネルギー球を、タママは打ち出した。  
アススの笑みにも気づかず。

「お願い、出して欲しいのです！！」

シオンはドアに飛びつき叫んだ。アススのあの表情、テララの話を出した瞬間に見せたあの冷たい、悪魔の様な表情が頭から離れなかつた。

「出して下さい！！ 誰か！！」

「シオン、殿？」

不意に後ろから響く声に小さな悲鳴を上げ、慌てて後ろを向いく。

「せつ拙者でござる！！ シオン殿！！」

僅かに緊張しているが耳慣れた声に、シオンの肩の力が抜けた。

「ドロロさん」

「無事で何より」

ドロロは一人頷くと、シオンに歩み寄り手を握った。

「早く逃げるで！」  
「早く逃げるで！」  
「待つて！！」

軽く手を引いたドロロに、シオンは大声を上げた。

「テララの所へ行かないと。アススが……」

「テララ殿なら隊長殿達が助け出しに行つていい最中だ！  
からきっと大丈夫でござるよ」

諭すような柔らかい声に、シオンは緊張が緩むのを感じた。

「でも、アススが

「アススがどうしたというのだ？」

またも響いた不審な声に、シオンは身を固くした。ドロロはシオンの手を離すと、短刀に手を掛けた。

「その声は、ナスカ！！」

「！」明察。巫女を連れて行かれると困るのでね、離れてもうおうか？

開け放たれたドアから姿を表した白銀の男に、ドロロは短刀を抜き放つた。

「それは出来ないで！」  
「それは出来ないで！」

ドロロは短刀を構えると、ナスカを凝視した。

「そうか、残念だ。なら

ナスカは右手の姿を変える。

「力ずくでも離れて貰おうか？」

足元に打ち込まれた銃弾に視線を移す事もなく、ドロロはちらりと部屋の様子を確認する。

見えたのは、小窓。

シオンの身長なら、ギリギリ抜けられそうだ。

「その窓からは逃げられない」

ナスカの声にドロロは目を見開いた。

「今俺たちがいるここは、巨大航空機の中だ。死にたくないなら賢明な判断を進める」

「巨大航空機！？」

ドロロは驚いたような声を出した。

「そうだ。大型戦闘航空機、アレティフォネ。我々の基地だ。分かつたならさつさと巫女から離れる」

苛立たしげに言い放ったナスカは銃口をドロロに向ける。

「それは、出来かねるでござる」

短刀を胸に引きつけると、シオンを背に庇う。

「参る！」

ドロロは空中に飛び上がり、ナスカに刃を向けた。

「こんなアホどもに伝説の邪靈アクアクさんと破滅の使徒キルルが倒されたなんて信じられませんね」シーカルとも取れる笑みでアススは笑う。タママは目を見開く。  
伸ばした右手に吸収されたのだ、嫉妬玉を。

「なんで……」

「なんで？」

アススは心底楽しいと言わんばかりの笑声を上げた。

「僕は混沌の魔龍、この位容易いんですよ」

「どうじょづもないのか？」

タママは腰を抜かし、アススを凝視せざるを得なかつた。

「さあ、死んで下さい」

「……」までくれば、安心でありますようか？」

「そ……さあな」

壁に背を着けたまま、ケロロとクルルは顔を見合せた。むちゃくちやに走つたせいか、心臓が早鐘を打つてゐる。

「大丈夫でありますか？」

「知らね……」

ひゅうひゅうと呼吸を繰り返すクルルにケロロは手を伸ばした。その時だつた。

「龍の仔……！？」

その声に2人はまた顔を見合わせ、ゆっくり振り向いた。

視線の先の金糸が揺れる。

「で……」

ケロロは思わず悲鳴を上げた。

「出たーッ！！」

視線の先のジユエルは腕を組み、仁王立ちで2人を睥睨した。

「龍の仔を返しなさい！」

ゆっくり歩み寄るジユエルに、ケロロは檻を抱え込む。

「嫌であります！！」

「なら死になさい！」

ジユエルが伸ばした指先がケロロに触れる瞬間、ケロロは目を閉じた。

「……ツハア！？」

意識が飛んだのは、ほんの数秒だつた。

弥々華は左手を軸に上体を起こし、控えめに絶句した。

ギロ口が撃つた弾丸は電撃に阻まれ、月が放つた電撃は銃弾に阻まれる。2人の攻防は硝煙の匂いと共に続いている。

「ギロ口？」

弥々華は半ば無意識に、言葉を漏らした。

ギロ口はパンと銃を放ると、ビームサーべルを転送する。次の瞬間、振り上げた月の手に弥々華の背は冷えた。

「ギロ口！！」

弥々華が叫んだ瞬間、強い光が辺りを満たす。瞬間に世界はモノクロになりビームサーべルが床に落ちた。

「遊びすぎたわね」

月は呻き声を上げた。血にまみれたその鬼気迫る姿で。

「もう少しで悲鳴を絞り出せそうだったのに、残念」

月の興奮しきつた目は弥々華に向かられる。

万事休す……か？

弥々華は見開いた目を静かに閉じた。

「そこまでだ！！ Resistance 月 李雷」「え？」

不意に響いた大声に、弥々華は目を恐る恐る聞く。その声は、親しくは無いもののよく聞き慣れた声。

「あ……嘘！？」

弥々華は思わず奇声を上げた。そこにいたのは威厳ある紫のケロン人。

「ガルル中尉！！」

ケロン軍最高精度スナイパーであり、ギロ口の兄ガルルの姿があつた。

「ガルル中尉！！」

弥々華は思わず目を見開いた。

「ガルル……なぜここにいる？」

ギロ口も予想外の助つ人をぎょっとした顔で凝視した。瞳の色が戻るほど、驚いていた。

「ケロン軍とAdascoからの命令だ。機密保守のためのな。だからこの戦場は私が指揮する」

ガルルは月から距離を取ると、トレードマークとも言える狙撃用のライフルを取り出した。自分の身長を超える長物を器用に構えると、耳に手を当て落ち着いた調子で口を開いた。

「こちら、臨時指揮官のガルル中尉だ。ケロ口小隊総員へ、これより3秒後に強制撤退措置を開始する」

その言葉と同時に、ガルルは引き金を引いた。

「タルルジエノサイドDX！！」

アススによって威力が上昇した嫉妬玉に、光線が収束する。光線はかき消されたものの嫉妬玉の軌道が変わり、壁に穴が開いた。

「あ……お前は！？」

腰を抜かしたままだつたタママは、攻撃の出どころを見るなり口をぽかんと開ける。

「た……タルル！！」

水色の体色に雀斑<sup>ゾバカラス</sup>。嫌というほど見慣れた笑顔に、タママはあつと声を上げる。

「師匠おー、助太刀に來たつすよーー。」

タルルはパタパタと手を振り、タママに満面の笑みを見せた。と思うと眞面目な顔になり、タママを見据える。

「じゃ、無かつた。師匠、撤退するつすーー。」

「え……ええ！？」

タママは思わず立ち上がると、拳を握りしめた。

「そんなの冗談じゃないーー！ シオツチとテララを誘拐した犯人をほつとけるかーー！」

タママはそのまま、息を吸い込んだ。

「撤退？」

「そうです」

ナスカとドロロの攻撃に割入った炎は音を立て爆散する。反射でよろめいたナスカから引いたドロロは、炎の主であるティトに視線を移した。

「先ほどあなた方が忍び込んだ理由とは別の理由で撤退を頼みたい。お願ひ出来ますか？」

ドロロは背後のシオンを顧みた。シオンは相変わらず田をまん丸に見開いてこちらを見ていた。

「ドロロ……さん？」

「シオン殿、こゝは引くでござる。ティト殿、かたじけない」

「こちらへ

ドロロはシオンの手を握ると、ナスカを睨みつけた。

「ケロロ軍曹！！」

目を閉じていたケロロはその言葉に目を開いた。痛みも、ない。

「その声はプルル看護長？」

「ええ。2人とも、怪我は無い？」

柔らかな物腰のピンクのケロン人、プルルは巨大な注射器を床に付け、ケロロに手を差し伸べた。

「我輩とクルルはね。でもテララが起きないんあります……ところでアイツは？」

至極真面目な表情のケロロに、プルルは背後を指差した。そこにはジユエルが静かに倒れていた。

「速効性の麻酔を打ったの。あなた方に気を取られている隙に。でも1分くらいしか効かないから時間は無いわ」

「そうでありますか」

「ところでおお

ケロロを遮るように口を開いたクルルは、分厚いレンズ越しにプルルを見つめた。

「なんでガルル小隊のアンタがここにいるんだよ？」

「それが、緊急事態よ」

プルルの口調は重々しい。

「ガルル小隊として、あなた方に指示します。今すぐここから撤退してください」

その言葉に2人は顔を見合せた。その瞬間だつた。

【こちら、臨時指揮官のガルル中尉だ。ケロロ小隊総員へ、これより3秒後に強制撤退措置を開始する】

不意打ち氣味と通信にケロロは氣を取られるも、とっさに耳に手を当てた。

「ガルル中尉！？ 強制撤退措置つて……てゆーか今どこに」

通信機に言葉を吹き込み終える間も無く、ケロロの視界は光に包ま

れた。

不意に感じた浮遊感はすぐに終わり、弥々華の体は床に落ちた。強い光で閉じた目を開けるとそこは見慣れない天井だった。

「ここは……」

「ブブブ…… 弥々華、久しふり~」

「ん?」

手を床に着いたまま、弥々華は首をぐるりと回す。

「あ……」

特徴的な甲高い笑い声は少年が発したものだった。オレンジの体色と野球のヘルメットに似た緑の帽子が目に痛い。

「トロロー!! 撤退つてどういう事? 後、こいじどこー?」

はじかれるように立ち上がった弥々華は、一段高い所に座るトロロに顔を近付けた。

「落ち着きなヨ。隊長がいないとボクからは何も言えないシ。あとそこ危ないヨ」

「え?」

弥々華が怪訝な声を上げた瞬間だった。

「うわ……」

「ゲロオーーー?」

「タマツー?」

「どわー?」

「くーっくーっくー 大丈夫かあ?」

「……これ…… 2回目え……」

今度は上から降ってきた4色に、弥々華は弱々しいツツツツツツを入れた。

「大丈夫でござるか？」

またもや横に着地したドロロが手を差し伸べる。

「はやくおいで……」

「弥々華殿！――しつかり」

明らかに窒息寸前の弥々華に、ドロロが軽く慌てた瞬間だった。

「テララ……」

その声を聞いた弥々華がゆっくりと顔を上げた。

「ぐ……もしかして、シオン助けたの？ あとテララつて

「左様でござる」

全員を下ろしに掛けたドロロはさりと口を開いた。

「テララを助けたのは我輩達であります！――」

弥々華の背中から降りたやたらぼうけいしげなケロロに、弥々華は全員を眺め回した。

「じゃあ、あたし達の目的はとりあえず成功したって事？」

「とりあえずは、な

ギロロの声に弥々華の顔が輝く。

「や……やつた！！」

テララの檻を開けたシオンは、テララを抱き寄せる。安らかな寝息に安堵したシオンはゆっくりと立ち上がった。

「皆さん、助けて頂いてありがとうございます」

ペコリと頭を下げたシオンに、ケロロはにこっと笑いかけた。

「じゃあ帰るでありますか。フランスへ」

ケロロがそう言った、その瞬間だった。

「ボクを無視して話を進めないで！」

「そうですよ、ケロロ軍曹」

天井から降り注いだ声に、弥々華は全力でその場から離れた。

ガルル小隊の面々が弥々華のいた場所に器用に着地するのを見て、

弥々華は小さく拍手をした。

「どうだったノ？」

「ここには無いよつだ」

「そつ……」

「あの、ガルル中尉」

トロロの落胆を見たケロロは、ゆっくりと口火を切った。

「何があつたのでありますか？」

「ああ、君たちには話すべきだったね」

ガルルは至つて普通にそう言つと、腕を組んだ。

「実は……」

「一体何をしに来たんでしょうか？」

タルルが消えた廊下で、アススは1人ごちた。焼け焦げだらけの廊下に、1人立ち尽くす。

「まあいいや、シオンの所へ」

アススがそう呟いた、その時だった。

「大変だ。龍の巫女が逃げたぞ！！」

不意に聞こえた金切り声に、アススは硬直した。

「龍の仔も消えたらしい。一体幹部は何を考えているんだか」

男の声に答えた声は、確かにそう言つた。

「…………あいつらだ」

アススは絞り出すように、呻く。

「あいつらがシオンを……」

次の瞬間赤い閃光が、アレティフォンから姿を消した。

「……………」

ガルルが口火を切つて数秒。全員が固唾を飲んで見守るもガルルは黙りこくつたまま。

「…………… 実は記憶清浄装置がResistanceに盗み出された。それを取り返すために我々は派遣されたのだが、装置は見つからなかつた。なあゾルル」

「ああ……影も……形……も」

その言葉に全員が上を見た。半身が機械化された灰色のケロン人、ゾルルが器用にぶら下がつている。

この人居たんだ、という共通の考えは全員が胸にしまつた。またもや長い沈黙が落ちる。

「あの、隊長」

沈黙を破つたのは弥々華だつた。

「その記憶なんとかつて何？」

「人の記憶を消す装置であります」

ケロロの脳裏に苦い記憶が蘇る。

「隊長」

「なんだ？」

その時トロロが口を開いた。

「なんか近づいて来てル。凄い勢いだヨ」

宇宙船が力強く左に傾いだのは次の瞬間だつた。

To be continued

## Episode・15 始まりの地

「なんか近づいて来てル。凄い勢いだヨ」

次の瞬間、宇宙船が力強く左に傾ぐ。

「なんだ！？」

「映像出すヨ！…」

トロロは慌てた調子でキーを叩いた。正面の窓にディスプレイが展開。映像が映し出される。

その映像に、ケロロ小隊は言葉を失った。

「アスス……」

シオンの言葉にガルルがゆっくりと振り向いた。

「知り合い、かな？」

シオンの視線が静かに落ちた。

「はい」

「隊長お！… 来るヨ！…」

今度は宇宙船が右に傾ぐ。

アサシン組を除き派手にバランスを崩した全員を無視し、ガルルは操縦桿に飛びつく。

「まずいな……動力系統をやられたか。墜ちるぞ！…」

今度は左へ、右へ。さらに回転。

猛攻を食らつた宇宙船は凄まじい勢いで落下を始めた。

「だ……ッ！…」

天井に打ち付けられた弥々華はそれでも必死に目を開く。

「誰か……」

ほとんどの面々が天井に打ち付けられていく。窓から見える景色は、確かに地面に近付いていた。

「シオン……」

アススは煙を吹き出した宇宙船に、満足げな視線を向けた。

聞こえないはずの悲鳴が鮮明に聞こえる。

「シオンを奪うから悪いんですよ。僕からシオンを取るから悪いんだ

その言葉に反省の色は欠片も存在しない。むしろ喜悦にゆがんです  
らいた。

「さあ、シオンを返してもらいますよ」

アススはそう呟いて、両手を差し伸べた。

「緊急着陸体制に入る……全員どこかにしがみつけ

ガルルはそう叫ぶと操縦桿を固く握り締めた。

墜ちていく。

墜落。

耳がキンと痛み、腹部に重力が掛かる。  
地面が、見えた。

「うわあああ――――ッ！」

絶叫が響いた、その瞬間だった。

【軍曹おーツ！】

突如飛び込んだ通信が、鼓膜を叩く。

次の瞬間、ぐんと宇宙船は静止した。重力に従つたまま、全員が床  
に打ちつけられる。

「……冬樹殿？」

ケロロは潰れた蛙のような声で、呻いた。

【軍曹！… 無事なの！？】

突如入った通信にて、ケロロ小隊は顔を見合せた。

「冬樹、今どこにいる？」

ギロロは床から起き上ると、ゆっくりと口を開いた。

【みんなの上だよ】

「トロロ新兵、通信反応はどこから出ている？」

自分の座席でひっくり返っていたトロロはふらふらと起き上ると、キーボードを叩く。

「ボク達の……宇宙船の上……だヨ……多分」

酔ったのか、顔を真っ青にしたトロロはそのまま後ろに倒れ込んだ。そのトロロを無音で近寄ったゾルルが支える。

「それってどういう事？」

地面に座り込んでいた弥々華が軽く口を開く。

「そのままの意味だる」

弥々華に答えたのはティートだった。真っ青な顔をしたシオンを体で支えている。

【そうだよ、ティート】

その言葉を聞いたティートはガバッと顔を上げた。

「リップか？」

【御明察！ 冬樹君達と救援に】

その言葉は途中で途切れた。

「どうした！？」

【墜ち……あいつが……！」……なぞ……】

ノイズ混じりのその声が完全に飲み込まれる。

次の瞬間、宇宙船は再落下を開始した。

干潟となつた海に、轟音が走つた。

墜ちてきたのは巨大な宇宙船が2機。それでも気付く者がいなかつたのは、時間が深夜であつたためだろう。

両機の扉が開いたのは、それから数秒後の事だつた。

「あ……生きてる」

弥々華は宇宙船のハッチにぐつたりともたれかかると、ゆっくりと這い出した。隣に目をやれば、同じように這い出した冬樹が見えた。

「冬樹殿！！ 無事でありますか！！」

弥々華の足元から這い出したケロロが、ぽんと宇宙船を蹴る。向かい合つて墜ちたケロロ小隊の輸送機に飛び移ると冬樹に飛びついた。

「冬樹殿、なぜここに？」

「伍長のお兄さん達が飛び出していく時、リップさんが事情を聞いたんだ。で、これは大変だつて」

「と、ということはみんないるでありますか？」

「つづん、もしもの時の為にモアちゃんが残つたよ」

「そうでありますか」

後ろから他の面々が這い出したのを見て、ケロロは安堵のため息を吐き出した。

「で、ここは？」

「モン・サン＝ミシユル。全ての始まりの地ですよ

その声に、顔を出した者全員が振り向いた。

「アスス！！」

ティトの腕の中でシオング田を見開いた。

「もう止めるのです！！ こんな事を止めて、早く家に帰りましょ

う！！」

アススはその言葉に、僅かな憎悪を含めた目を細めた。

「帰る？ 僕に帰る場所なんてありませんよ。それよりシオング、行きましょう？ 僕たち2人の世界に」

そう言ってアススは両手を差し伸べた。

「さてケロロ小隊の皆さん、あなた方を軍人として質問します。地獄がどこにあるのか知っていますか？」

「何を行つてありますか！？」

ケロロは思わず食つてかかるように応答する。その表情にアススは酷薄とも言える笑みを浮かべて見せた。

「分からぬのなら教えて差し上げます。それは、ここですよ」

アススはそのまま自分の胸に手を当てた。

それが合図となつたように、宇宙船の周りから骸骨や土塊の手飛び出した。

「さあ来なさい、僕の兵士達」

「ナスカ様」

無言で座していたナスカの下へジュエルが駆け込む。

「なんだ？」

「アススが、奴らを追つて船外へ。如何なさいますか？」

その言葉に、ナスカの視線はジュエルへと移った。

「別に構わない。予定通りだ」

呆気に取られた表情のジュエルを無視し、ナスカはちらりと天井を見つめた。

「シャドウに進路を変えさせろ。目的地は『選ばれなかつた世界』。基地へと帰還する」

「アススはどうするのですか？」

「放置だ」

その言葉に同情の色は微塵も無い。

「奴はもう、使えない。巫女と出会つてしまつたからな」

「はい」

ジユエルは軽く腰を折ると、退出しそうと踵を返した。

「ジユエル」

「はい？」

ジユエルはそのまま、器用に静止する。

「龍の書を巫女の下へ転送しろ。アススもあれが無ければ幼いまだだ」

「了解致しました」

「シオン！－！」

全員が地面から突き出した手に氣を取られた、その一瞬の出来事だった。

「桃華！－！ テララ！－！」

赤い閃光は宇宙人に突っ込むと、シオンの手を掴み抱き上げた。  
「シオンは頂いていきます。さあ行きなさい－！ 皆殺しです」  
アススはシオンを姫抱きにすると、モン・サン＝ミシェルを目指し加速する。

「まずいな……」

クルルは宇宙船の上に腰を下ろすと、ノートパソコンを開き舌打ちした。

「あの野郎、『本来の姿』に戻るつもりみてえだ」  
「まさか！？ どうすればいいでありますか？」  
「奴さんを止めるつきやねえだろ…… オイ、ガルル！－！」  
「なんでしょうか？」

ガルルは手元に愛用のスナイパーライフルを呼び出すと、クルルをチラリと見た。

「足止め頼む」

「了解。ですがクルル」

「なんだ？」

「事情は後で説明を」

「ああ」

「ねえティト。あの2人、なんか通じ合つてゐよね」

「だな」

どこか繋がりの深さを覗かせた2人を、新米2人はちらりと見やつた。

「よし、隊長。準備は出来たぜえ？」

「了解であります」

冬樹の隣に立つていたケロロはまた飛び出すると、宇宙船の上に立つた。

這いだしてきた死靈達を睥睨しながら口を開く。

「これよりケロロ小隊はシオン殿救出に向かうであります！ ガルル小隊は足止めを、冬樹殿達は我々と一緒に。方法は……まあ適当で」

「…………了解！！」

たくさんの声が重なり響く。

ケロロ小隊とパートナー達、そして弥々華、リップは宇宙船から滑り降りると大地へと立つ。

「そうだ、ガルル中尉」

「なんだね、弥々華曹長」

弥々華は立つたまま軽く後ろを見た。

「ティトを貸して下さい」

その表情は至極真つ本当に本気そのもの。

ティトはガクリと頭を落とし、ケロロは軽く苦笑した。

「どうするかね、ティト曹長」

「行つてもいいんですか？」

ティトは頭を下ろしたまま、ガルルを見据える。

「ああ」

「すみません、隊長」

そう言つてティートは、宇宙船を飛び降りた。

「さて、行くでありますか。目指すは、モン・サン＝ミシェル！！」

ケロロが言い放つと同時に、ガルル小隊が飛び出した。

再戦の火蓋はここで切られた。

To be continued

## Episode・16 龍の目覚め

そこは、真っ暗な部屋だった。

モン・サン＝ミシールの地下深く。普通ならばとてもたどり着けない深さに作られたレンガ作りの部屋だ。アススが指を鳴らすと、壁に備えられた燭台がぼんやりと光を放つ。アススは抱えていたシオンをそっと真ん中に据えられた台座に座らせた。

「アスス。ここは、どこなのですか？」

「ここですか？」

アススはその言葉にゆっくりと顔を伏せた。

「ここは、僕達が封印されていた場所ですよ」

その言葉は、シオンを驚かせるにはぴったりであった。

「あなたが僕達を産むまで、僕達はここにいました。2人……いいえ、あの時は1人でしたね」

珍しく、アススの表情はシニカルであった。

「まあ、僕の生い立ちなんてどうでも良いことです」

その言葉を発した瞬間、シオンの膝に龍の書が現れた。

「ああ、ナスカ様ですね。転送してくれたんですよ、きっと」

驚いたように目を見開いたシオンに対し、アススは事も無げな調子であつた。

「さあ、シオン」

アススはそのまま、龍の書に触れるとページを開く。

「歌つて？ 僕の為に」

アススはそう言って目を細める。

「僕は本当の僕に、混沌の魔龍に戻るんですから」

「邪魔だ！！」

炎、硝煙、光線、衝撃波。

飛び交うそこは、まさに戦場であつた。

すぐそばに見えるはずのモン・サン=ミシェルが、今は遠く感じた。

「キリが無いであります！！」

「それならこいつらからは逃げた方が良くないですか？」

リップの言葉にケロロは頷く。

「ティト！！」

「ああ」

ティトは唸るように頷くと、地面に手を当てた。それを見た弥々華は近くにいたタママと小雪を引き寄せる。

「龍炎翔苛、発動！！」

流れた蒼炎が綺麗な円弧を描く。次の瞬間、吹き出した火柱が死靈達の体を焼いた。

その火柱から飛び出した小さな影。それはケロロ小隊達の乗つた巨大符であることを知るものは、いない。

「出来ません」

シオンはそう言つて、ゆっくりと首を振る。

「あなたは地球龍の片割れなのでしょう？ 私には……出来ません

「シオン？」

「お願いアスス、一緒に帰るひつゝ、みんなで帰るひつゝ」

アススの肩をシオンは柔らかく抱き寄せた。

「帰るひつゝ？」

アススの表情は変わらない。凍りついた無表情で、シオンの肩に触れる。その鋭い爪こそ立てなかつたものの、その腕には力がこもつていた。

「ふざけないで下さいよ。シオン

わずかに震えたその声は、どこまでも硬かつた。

「僕は本当の姿にならなきや、あなたに会えた意味がないんですよ

！」

アススの瞳がシオンを捉えた。

「本当の姿ないと、あなたを独り占め出来ないじやないかあ！」

「その言葉と共に、アススの体から溢れ出た物。それは鮮烈な赤いオーラ。

「他の奴らにシオンを取られたくないんですねーー！」

シオンは呆気に取られた表情で、アススを見た。生まれて初めて、シオンにはアススが恐ろしく見えた。

「だから、歌つて……僕の為に。じゃなきや、僕はシオンの周り全部を壊します……。あの縁や黒いのも、家族もなにもかも……」

アススはゆっくりとシオンを抱き寄せた。その動きに、不慣れな所はない。

「さあ、歌つて？」

シオンはゆっくりと俯ぐ。静かに流れたのは、涙。

「シオン？」

龍の書が、音を立てて開く。

「『めんね……みんな』

シオンの目の前に現れたのは大きな光の珠。

唱えるのは、言霊。

ゆっくりと、シオンからアススは手を離した。床に手を付ける。浮

かんだ表情は喜悦そのものだつた。

光の珠の横に伸ばされた指先が激しく動き出す。

くつと、アススの顔が上がる。

「あ……あ……ああ———！」

「シ……オン」

ガルル小隊の宇宙船に小さな声が響いた。

「シオ……ン」

冷たい床に横たわった体が、ピクリと動く。

「シオン！！」

開いた瞳はオレンジ。

次の瞬間、青い閃光が宇宙船から飛び出した。  
残された青いベレー帽に気付くものはいない。

「あ……アスス」

ゆっくりとだが肥大化していくアススの体に、シオンはそっと手を伸ばした。

「ぞ……わら……ない……で」

わずかにノイズの掛かったその声は、はっきりと拒絶の色を帯びていた。

「歌い……づ……づけ……で……」

「アスス……」

アススの体躯は既に、シオンよりも大きくなっていた。シオンはそつとアススから離れると、歌を続ける。

「シ……オン……いが……ないで……」

アススはゆっくりと左腕を伸ばした。

アススの腕が、シオンに触れる。

「僕ど……いつじょに……」

壁にぴったりとくっ付いたシオンは、恐怖に目を見開く。

「アス……ス？」

アススの体は、部屋が一杯になる程巨大になっていた。爪ですら、シオンの体と変わらないくらいの大きさであった。

「シオン……僕は……」

次の瞬間、アススの体は光に包まれた。

「寒い……」

時期的に寒さは当たり前であった。だが不意に体を冷やした冷氣は、異様とも思える感覚であった。

「あ？」

「どうしたでありますか？」

「雲が……晴れしていく？」

弥々華がうすぼんやりと咳いた瞬間だった。

「ボケガエル！！ あれ……」

夏美が指差した先、それは

「モン・サン＝ミシェルが……」

真っ赤な光を放つ、モン・サン＝ミシェルであった。

「孤独の砦……高き城」

地下室に、小さな歌声が響いた。

「紅青2つの魂は……いつしかやがて結びつく」

部屋を満たすのは、真っ白い繭とも、卵とも言える球体。歌声はそこから響いていた。

「僕が望むは安寧の闇、永久の世界……2人だけの」  
球体は生命の息吹を感じさせるように僅かに波打つ。  
「消え行く2つの御名の元……終わり始まる……」

歌声は、不自然な場所で途切れた。

「近付いてくる。邪魔者が……」

アススの声は、鮮明な憎悪を帯びた。  
「我が僕たる魔獸よ……彼らを殺せ」

117

モン・サン＝ミシールの光が、輝きを増す。目が痛くなるような光の中を飛ぶ。

寒さが増していく。

全身が凍りつくような寒さの中で、ひたすらにリップは符のスピードを上げ続けた。

その時だった。

大音量が耳をつんざく。

甲高い音と低い唸る音が混ざり合った音に一行は思わず振り向いた。

「……なんだ、あれは……」

「象ありますか？」

ケロロの喰きは最もであった。

簡潔に言つならば、その生き物は紫色の巨大な象といった物だった。巨大な体躯、4本の象牙、6つの眼がより醜悪さを際立てている。

「違うと思つよ、隊長。あれはきっとベヒーモス」

「知つてるでありますか？ 弥々華殿」

振り向いたケロロに弥々華は軽く頷いた。

「旧約聖書に出て来る、陸の怪物でしたよね」

「冬樹よく知つてるね」

「関心してゐる場合か！？」

ギロロの言葉に3人はやつと顔を怪物、ベヒーモスに向ける。

ベヒーモスはその長い鼻をこちらに向けたまま静止している。

「え？」

弥々華がその光景に声を上げた瞬間だった。ベヒーモスの鼻から、烈火が吹き出す。

リップの加速も間に合わない。

万事休すか？

半ば無意識に、全員が目を閉じた。

To be continued

青い影が飛ぶ。

「ティート！！」

弥々華は思わず声を上げた。

烈火に突つ込んだ青い影は手を突き出す。

「させるか！」

ティートの指先に捉えられた炎は、赤から青へ染め変わる。さらに炎は逆流、ベヒーモスへと殺到した。

「リップ」

ティートは囁くように、名を呼んだ。その言葉にリップは顔を見合わせ、頷く。

「弥々華、先にシオンとアススのところに行つて？」

「……え？」

「ここは、私達が食い止める」  
リップの顔に、迷いは無かつた。

「だからケロロさん達と、アススを止めて」

「リップ……」

「了解であります」

弥々華はリップを凝視する。

そして、小さく息を吐き出した。

「死ぬなよ」

「お互い様だよ」

2人は軽く頷く。弥々華はリップの頭を軽く撫でた。

「ケロロさん、舵取りを頼みますね。多分体重移動で動けますから」  
リップはそう言つと、軽くケロロの頭に触れる。

「了か……ちょっと待つて！ リップ殿お！？」

その言葉を黙殺したリップはティートの隣に並ぶ。

「ティート」

「ああ」

ティトは頷く。

次の瞬間、符は急降下。

地面ギリギリで2人は飛び降りた。

「ちょっと……これどうすれば？」

その言葉と同時にケロロの体重が前に掛かる。次の瞬間、符は凄まじい加速と上昇を見せた。

「ゲ～口～～～ツ！？」

ドップラー効果を遺憾なく發揮した符は、モン・サン＝ミシェルへと吹き飛んでいった。

「やつぱり本氣の方がいいかな？」

リップは眉間にシワを寄せ、呻いた。対峙するベヒーモスは、その濶んだ瞳をこちらに向ける。

「だな。さつさと戻すぞ」

ティトは苛立ち混じりに、舌打ちを漏らす。

ティトの顔をちらりとリップは見た。

「頑張ろうね」

ティトに視線を移し微笑む。

「「能力解放」」

声が綺麗に溶け合つた。

「百鬼夜行、符術紙鬼！！」

「灰燼散らせ、龍炎翔苛！！」

2人の言葉と共に砂が吹き上がる。砂煙を切り裂き現れた彼女らの姿は先ほどとは異なっていた。

ティトは蒼炎を左腕に纏うと、右腕を腹部に引きつけ構える。

リップは符を扇子のようにして幾枚も持ち、後ろに緑色の肌の巨人を数体控えさせていた。

「行くよーー！」

そう言つて、2人は駆けた。

「ぶつか……！」

次の瞬間、鈍い音がケロロの世界を満たした。派手に吹き飛んだ全員がレンガの床へ強かに体を打ちつけた。1番前で舵取りと言つ名の暴走を続けたケロロだけは、壁に全身をめり込ませてはいたが。

「……大丈夫か？」

ギロロはそう言つて、後ろを振り向く。夏美がサブローと小雪に引つ張り起こされているのを見て、軽く殺意を覚えたが今は無視する。「伍長ー。お願い、手伝つて？」

冬樹とタママと弥々華がケロロを引きずり出しているのを見たギロロはため息を吐き出した。

「シオン……」

冬樹の後ろにいた桃華は不安げな声を上げる。

「ゲロッ！？」

壁から抜けたケロロが奇声を上げた。その言葉を最後に周囲に静寂が落ちる。その時だった。

ドクン……

心臓の鼓動。

その形容が相応しい音が、空気を揺らした。

「なん……どわ！？」

ギロロは思わず悲鳴を上げた。足場が、モン・サン＝ミシェルが崩れ始めた。

「なんだ、あれは」

ガルルは思わず、スナイプの手を止め遠くを見やつた。その視線の先で起きた光景は、まるでこの世界の物とは思えない物だった。モン・サン＝ミシェルが、崩れる。まるで分解されて行くかのように。その中央には巨大な光の珠があつた。繭と、それを守る聖域のように、モン・サン＝ミシェルは破壊された。

それはまるで、地球龍が生まれた瞬間に酷似していた。

「あれは……」

弥々華は絶句した。

真っ赤な光を放つ繭が弾け飛ぶ。突如吹き荒れた暴風に、全員は体を庇つた。

光が、止んだ。

しゅうしゅうと音が響く。呼吸に似た音にそれぞれが目を開け、愕然とした。

「なんですかアレ！？」

「面妖な……」

タママとドロロは思わず率直な感想を漏らす。

繭があつた場所、そこにいたのはまさしく異形といつに相応しい存在であつた。悪魔の翼を生やした巨龍は、恐ろしい咆哮を上げた。4つの目が見開かれる。

「あ……」

その時桃華は思わず、体を引いた。

「シオン！」

その声に、全員の視線が一点に注がれた。巨龍の頭部に乗つた小さな青。ぐつたりと倒れたその姿はまさにシオンその人であった。

「龍の巫女を知りし者、と言つことは汝等は龍を司る者か？」

不意に、声が響いた。

「だ、誰でありますか！？」

ケロロが張り上げた声に、その声は愉快そうな笑い声を上げた。

「私は混沌の魔龍。星を喰らい、龍の巫女と龍を司る者を永遠に手中にする存在也！」

「混沌の……まさか……」

ケロロは声を上げた。その声には驚きの色が強い。

「アススでありますか！？」

「その通り」

龍は満足そうな声を上げると、右手を地面に付けた。人間にも似たその動きに、全員が首を傾げた。

次の瞬間、凍えるような風が一層強さを増す。

「何をする気だ？」

「まさか……」

クルルは慌ててかがみ込み、パソコンを開いた。

「モア！ 聞こえたら地球のデータを出せ。内部温度が知りたい

【クルルさん？ ちょっと待って下さい】

基地に通信を掛けると、モアの慌てきつた声が響いた。

【出ました！ そんな……地球の中心核の温度が下がっています】

「やつぱりか

地球龍誕生と同じ事が起きている。今、この地球上で。

「地球が滅びるって事……？」

弥々華は青ざめた顔で小さく悲鳴を上げた。

「軍曹さん……」

タママは思わずケロロを見つめた。

「ケロロ……」

ギロロに急かされたケロロは、アススから田を離す。

「我輩達はこのまでは奴には勝てないであります。でも」

ケロロは冷静に咳くと、振り返った。そこには小隊やパートナー達がいる。ケロロは声を張り上げた。

「ドリ」「ンウオリアーになれば、勝ち田はある……！」

ケロロの声に、全員が飲まれた。

「弥々華殿。シオン殿の所までどの位で辿り着けるでありますか？」

弥々華は少し驚いた顔でケロロを見た。

「30秒くらいあれば、なんとかなるよ」

片道だけどね、と言えばケロロは頷く。

「なら、時間は我輩達が稼ぐであります」

「」「」「了解」「」「」

ケロロの言葉に、小隊員が敬礼する。

「待ちなさいよ」

その声に、ケロロは縮み上がった。

「な……夏美殿、それに冬樹殿？」

「アンタ達ばっかりにいい格好はさせられないわ

「軍曹達ばっかりに危ない事はさせられない」

強い口調。

気圧された小隊が1歩下がる。

「」「そういうことなら」「」

その代わり、口を開いたのは小雪とサブロー、桃華だった。

「私もお手伝いします」「」

強い意志を秘めた桃華と小雪が口を開けばサブローが笑う。

「じゃあこれがいるよね」

語尾に音符でも付き添うな声で言つと、サブローはサラサラと絵を描き紙飛行機を折る。

夏美と桃華に当たつた紙飛行機は2人の姿をパワードスースに変えた。小雪も忍装束に早着替えする。

「じゃあ、あたしも」

弥々華はそう言つと、黑白風華を構え直す。

「華開け、黑白風華！！」

黑白天使に姿を変えた弥々華が、大鎌を構え不敵に笑う。

「さて、隊長。派手に行きますか？」

「そうでありますな」

ケロロはキリリとアススを見つめる。

「ござ出撃であります！！」

To be continued

## Episode・18 龍の戦士

ぐんと膝を屈めると、弥々華はアススを見据えた。  
「行くよ……！」

足元のアスファルトが弾ける。天使は舞い上がった。  
その後ろにケロロ小隊とパートナー達が追随する。

「楯突く気が……」

アススは唸ると、すうと息を吸い込んだ。

「させないよ」

小さなUFOに冬樹と乗ったサブローが不敵に笑う。紙に描いたのは超大型スピーカー。

「サブローーー！」

クルルが投げたコードを受け取ったサブローはそれを素早く繋ぐ。  
「歌はイイよね……つと。ほら、行つけーーッ！！」

魔龍の咆哮と、スピーカーから発せられた音楽が相殺しあう。掛か  
つた曲はいわゆる電波。

この緊迫した状況に……と苛立ちを噛み殺したギロロは、背後に叫  
んだ。

「行くぞ、夏美！！」

「ええ！」

そのまま、ギロロはロケットランチャーを構え、撃ち込む。さらに  
夏美が光学兵器で追撃を掛ける。

「タママー！」

「モモカー！」

ギロロと夏美はその声に体をよけた。

「インパクト！！」

2つの光線が、真っ直ぐに収束する。

「ドロロ忍法 究極秘奥義 流星十字手裏剣！！」

「小雪忍法 蛇群の如し《じゃぐんの》とし》」

さらに2人の手裏剣が、アススの元に向かう。

「愚かな」

全ての攻撃を受けきつたアススは低く吐き捨てた。  
その体に傷は無い。

「無傷か……」

ギロロは悔しげに呻いたが、一方ケロロは小さく笑う。

「いや、問題無いありますよ」

「その通り！！」

ケロロに答えたその声に、アススはハッと顔を上げた。その声はアススの頭の上から、響く。

「シオンと、この本は返して貰うよ」

弥々華はアススの頭の上で軽快に笑うと、背中へと飛び降りる。小脇に抱えるのは、シオンと龍の書。

「貴様……何時の間に」

「ざまみる」

にいと口角を上げた弥々華は真っ直ぐに飛ぶ。

「弥々華殿ナイス！！」

ケロロは弥々華に微笑み返した、その時だった。

「ん……」

ゆっくりとシオンの目が開く。弥々華はそれをちらりと見た。

「あ、大丈夫？」

「は……アススは？」

そしてその視線がそろりと動く。次の瞬間、シオンの体が震えたのが弥々華に伝わった。

「そん、な」

シオンの視線には姿を変えたアススがいる。シオンはその瞬間全てを理解した。

「アスス！！ お願い止めて！！」

「巫女よ」

アススは重々しく口を開いた。

「何故、その様な事を口にする」  
シオンは静かに目を見開いた。

「アスス」

「と言うことだ。さあ、巫女を返せ」

「やば……」

薙ぎ払う。

たつたそれだけの所在が、弥々華の軌道を変える。  
シオンをかばつたまま、弥々華は真っ直ぐに落下した。

「紙鬼！」

叫んだ瞬間、吹き飛ばされた緑の巨人にリップは手を伸ばす。  
鼻を振り回すベヒーモスをリップは睨み付けた。巨人の体の一部は  
紙に戻っている。

リップは符を投げて、巨人の腕を再生させた。

「焦るな、リップ！」

勢いを付けて殴りかからせた巨人が、鼻に弾かれるのを見たティト  
が舌打ちを漏らす。

「炎槍龍舞」

ティトは両腕を伸ばすと幾つも炎を槍の形に変え、打ち出した。  
だがベヒーモスはそれを鼻で搔き消そうと振り回した。

「……かかりやがつたな」

ティトの顔が不敵に笑んだ。

炎はかき消される事は『ありえない』のだ。  
ベヒーモスの鼻に炎が、突き刺さった。

突き刺され灼かれる痛みにベヒーモスは咆哮した。

「暗殺兵術……母の力！」

ドロロの声が聞こえた瞬間、地面から巨大な手が姿を表した。真っ直ぐに落ちる2人の体を、受け止める。

「弥々華さん！！」

シオンは思わず叫んだ。ぐつたりした弥々華は完璧に気絶している。「シオン殿！！」

その様子を真上で見ていたケロロ達が降りてくる。シオンは顔を上げた。

「弥々華さんが……」

「弥々華殿なら大丈夫であります。それより、アススを止めなきやまずいでありますよ！」

シオンは逡巡するように全員を見回す。

「はい！！」

シオンは厳かに頷くと、龍の書を弥々華の腕から抜き取った。ぱらりと本を開くと、青い光球が浮き出す。

「冬樹殿」

精神を整えるシオンを見つめる冬樹をケロロは見やつた。

「（）で夏美殿達と一緒に、弥々華殿を見てて欲しいであります」

ケロロの声は重い。それでもケロロは笑む。

その表情にも、冬樹は容易く頷けなかつた。

「冬樹殿はここで待つて欲しいでありますよ。大丈夫、我輩達は必ず帰るでありますから」

「軍曹……」

ケロロの声は冬樹を強く案じていた。冬樹は目を閉じた。

「必ず、帰ってきてね。軍曹」

「ケロロさん、準備出来ました」

ケロロはその声に踏み出す。

「了解であります！！」

そう言つてケロロは振り返つた。

「小隊に命令、必ずアススから地球を取り返し

ケロロはチラリと冬樹を見る。

「必ず、日向家へ帰るであります！！」

「「「「了解！！」」」

小隊員が敬礼を返す。

「シオン殿」

ケロロの声にシオンは頷いた。

「では、行きます」

ゆつくりと指先が動き出す。

唱える言靈が、力を増した。

ケロロ小隊の咆哮が、天地を搖るがす。

光は伸び行き、現れた異形は天へと翔る。

「現れたか……龍の戦士よ」

重みを増した空気にアススは目を細めた。と、同時に翼を羽ばたかせる。

その体が軽やかに舞つた。

「アスス！！」

ケロロの声が、世界を揺らす。「お前の好きにはさせんぞ」

「地球は拙者達が守りきるで！」やる

唸るギロロは近代武器を身に付けた赤い龍、隣に立つドロロは対照的に日本刀を腰に下げた青い龍だ。

「シオツチは絶対渡さないですう！！！」

「つーわけだな。くつくつく……」

東洋的な黒龍に姿を変えたタママが決意を言い放ち、その隣ではクルルがヘッドホンからケーブルを生やした龍として陰気に笑っている。

「いざ、勝負であります！！」

ケロロはケロンスターを腹部に輝かせ言い放つ。その姿はまるで西洋の伝承に伝わる龍そのもの。威厳を秘めた声は明らかな敵意を秘める。

「良かる！」

不敵なケロロ小隊に、アススは笑んだ。

「汝らのその力、我が叩き潰す！」

冷徹な声。

そして龍達は、動いた。

「つたあああ！！！」

ギロロは吼える。

巨大な銃器を構えると、掃射する。

「タママインパクト！！！」

タママが吐き出した金色の光線。

「ドロロ真空斬！！」

ドロロの居合いは衝撃波を飛ばす。

クルルも相変わらずの表情で、電撃を飛ばした。

同時にやってきた攻撃を、アススはすうと睥睨した。

「温い」

それは腕の一振りに過ぎなかつた。攻撃はその一振りでかき消された。

「我が求める力はこの程度か？」

「馬鹿にしないでほしいであります！！」

ケロロの声が響く、背後から。その言葉にアススは振り向いた。ケロロが振り上げたのは、トリコロールのハンマー。

龍らしからぬ鈍器が振り下ろされる。

アススは動いた。

腕がケロロのそれを掴む。

「あ !?」

次の瞬間、アススの腕がケロロの腹部に吸い込まれた。

噴き出したのは、鮮血。

混沌が目覚めた。

テララの頭の中に声が響く。

止める。

頭の中に響く声が、だんだんと強くなつていいく。

テララには何も分からぬ。

ただ頭の中の声だけが、テララを突き動かしていく。

To be continued

「こんなところで……終わるのか？」

鮮明に、自分の腹部から伝わる痛み。

アススの手が、血に塗れる。

ケロロにはそれが、遠く見えた。

墜ちる。

不甲斐ない……情けない……自分は……。  
体と意識が比例する。

全ての感覚が閉ざされた瞬間、ケロロは青い光を見たような気がした。

「軍曹……」

緑色の巨体が、墜ちる。

冬樹にはそれが、スローモーションのように見えた。

血飛沫が、雨のように地を濡らす。

「そんな……」

嘘だ、帰つて来るって言つたのに。

また、あの時みたく死んでしまうの？

「軍曹おーーーッ！！」

冬樹は叫んだ。ただ、それしか出来なかつた。ズンと体に衝撃が伝わる。

目の前のケロロは力無く横たわるのみだつた。

「そん……な、ボケガエル？」

夏美はよろりと、前を見た。

普段は意識しないものを急に見せつけられたせいか、恐怖と吐き気  
が襲いかかる。小雪はそれをゆっくり支えた。

冬樹は駆け出しケロロの体によじ登る。

その時だった。

「…………」

弥々華はゆっくりと意識を覚醒させた。

「…………痛つた…………って、何が起きたの?」

弥々華は体を起こすと、きょとんとした顔で辺りを見回す。まるで  
空気が違う。

「弥々華さん……ボケガエルが…………」

今にも泣き出しそうな夏美に、弥々華は首を傾げた。

「隊長が?」

「ボケガエルが、死んじゃうのよ!――」

その言葉に、弥々華は田を見開いた。

「隊長が!?」

弾かれたように、弥々華は立ち上がった。ふらつきつつも、夏美が  
指差す方に駆け出す。

「軍曹!――お願い、起きてよ!――軍曹……軍曹――」

「こんな事ツ……隊長……」

ケロロの田体によじ登ると、冬樹の隣に座り血にまみれるのにも構  
わず、手を傷口に当じた。

「忌術……光癒……」

お願い!――と悲鳴を上げた弥々華。それはすでに絶叫だった。悲  
鳴に似た声が漏れる。

「止まれよ!――頼むから止まつてよ!――」

ひゅうと、誰かの喉が鳴った。

「軍曹さん！？」

「行くな、タママ」

思わず追いかけかけたタママを、ギロロは静かに制した。

「でも

「

「聞け！！ 奴は…… そう簡単には死なん。だから早く、カタを付けるぞ」

冷え切つた鋼鉄、そんな声にタママは背を伸ばす。

「は、はいですぅ！！」

恐ろしく冷静な声にタママは萎縮しかけた。

その時だった。

「まずは、1人」

背筋を逆なでする様な嘲笑を込めた声。全員の視線が、アススに向かう。

「何が可笑しい」

「私は幸運だ、と思つたまでだ。汝らの怒り、ひしひしと伝わる。どうやら我は当たりでも引いた様だ」

ざわりと、肌が粟立つた。

「ふ……」

ギロロの胸に、反吐でも出そうな嫌悪感と怒りが湧き出す。

「ふざけるな……！」

「そういう怒るな、我にそこまでして力を与えたいのか？」

ギロロの中の何かがそこで切れた。

瞳孔が、染め変わる。

ギロロは腕の銃を、構える。

アススの笑みは、深まった。

伝わる殺意がアススに力を与える。

撃ち出された銃弾を、アススはただ見据えた。銃弾が掠める。だがさしたる傷には、ならない。

そのままギロロに肉薄したアススは、真つ直ぐに手を突き出した。

「させねえよ！！」

叫んだのはクルルだつた。

放つ紫電が、アススの手を止める。

「隊長に仇なす者は……」

ドロロの声が、絶対零度に響く。

「許さぬ」

真上から放たれた刃を、アススは躊躇無く受け止めた。そのまま刃を掻むと、真つ直ぐに投げ落とす。

「ぐつ！？」

ドロロの体は、ギロロに衝突すると、地面に向かつて墜ちていった。

「オッサン！！」

「ドロロ先輩！！」

後輩2人の悲鳴が、空を裂く。

「怒り、憎しみ」

すうとアススは吐き出した。

タママに肉薄すると、拳を顔面に叩き込む。

「悲しみ、恐怖」

さらに、タママを掻むとクルルに投げつける。

「汝らはただ、我の前にひれ伏すしかないのだ。龍の戦士よ

嘲笑と狂気が混じり合う声が、響く。

「さあ嘆け、怨め、憎め！！ それが我の糧となる」

そう叫び、ギロロに狙いを定め雷の玉を作り出す。

「魔龍の雷」

その攻撃が放たれた、刹那だつた。

「ダメ！！」

甲高い声が響き渡る。

青い光はそうして割入つた。

悲鳴に似た声が漏れる。

「止まれよ！！ 賴むから止まつてよーー。」

ぐつと、弥々華は拳を握り締めた。

「お願い…！ 軍曹…！ 起きてよーー。」

じろじろした血液と二人の涙が混ざり合つ。その時だった。

「……冬樹殿？」

「軍曹…！」

「隊長…！」

大きな手が、柔らかく触れる。

「血まみれになっちゃって……」

「そんな事……言つてる場合？」

ぐちやぐちやになつた表情。

「心配したんだよ……」

弥々華はケロロの手に触れた。

「死んだかと思つた……」

「物騒なこと…！ ありますなあ」

ケロロは苦笑すると、腹部の様子を確認した。

確かに尋常じやないくらい痛いが、死ぬ事は無いだろう。内臓は多分無事だ。

「麻酔欲しいかも」

「軍曹？」

「なんでもないでありますよ、冬樹殿。それより弥々華殿、止血位までいける？」

ケロロは弥々華を見て、さらに上を見た。

「今、やって……どうしたの？ 隊長」

「あれは……」

ケロロが小さく咳く。

その言葉に、2人は頭上を見つめた。

「青い、光？」

冬樹はぼんやりと吐き出す。

灰色の空を裂く、真っ青な光。

ギロロとアススの間に、その光は割入った。

「ダメ！…」

次の瞬間、響いた大音声に2人は顔を見合せた。  
その声はここにいる全員に取つて耳慣れただものだつた。

「…まさか」

不意にシオンは口を開いた。

「あれは、テララなのです！…」

シオンは驚いた声を上げると口を抑える。

「でもなんで、テララが？」

桃華の問いに、シオンは逡巡する。

「…それは、アススが地球龍の… 地球龍のもう一つの心、だからなのです」

「え？」

意外過ぎる言葉に、全員が可笑しな声を上げた。

「テララとアススは元々地球龍なのです。アススは言つてました。テララは私の所で生まれましたけど、アススは違う場所で生まれてしまつたんだつて。記憶はテララが、知識はアススが持つて生まれてしまつて、そして心も、善悪2つに別れた」

「そんな大事な事なんで早く言わないんだよ」

弥々華が唸ると、冬樹はまあまあと宥める。

「ごめんなさい」

シオンは小さく謝ると、ケロロの方を向いた。

「ケロロさん……お願い、私を彼らの元に連れて行つて欲しいのです！！ 私は、テララもアススもなくしたくないのです！…」

「シオン殿……分かつた、であります」

ケロロはやつらと弥々華と冬樹を床に下ろし、ゆつたりと立ち上がる。

血は既に止められていた。

シオンをゆつくりとすくい上げると、頭に乗せる。

「行くでありますよ！ シオン殿」

「はい！」

2人は頷きあうと、ケロロは翼を羽ばたかせた。

「待つて！ 軍曹、僕も」

冬樹の言葉は間に合わなかつた。ケロロは空高く舞い上がる。

「軍曹……」

「大丈夫だよ、冬樹」

弥々華はそう言つて、冬樹の肩を叩いた。弥々華も舞い上がる。

「隊長は必ず帰る」

その一言を残して。

To be continued

## Episode・20 混じり合ひの魂

「テララ……」

突然の闖入者ちなんじゆしゃに声を上げたのは、誰だったのだろうか。先ほど、放たれた一撃はテララの目の前で打ち消された。

「アスス、止めよう」

「来るな……消されたいのか！？」

テララはゆっくりと、アススに近寄った。

「もう、ダメ」

アススとテララの距離が縮まっていく。アススが振りかざした手をゆらゆらとかわしたテララは、アススの額に体を預けた。

「止める！！」

テララを中心に、アススの体が輝き出す。

「テララ、悲しい」

テララは目を閉じた。

「アスス、悲しい？」

アススの体が光に包まれた、その瞬間だつた。

「アスス！！ テララ！！」

シオンの絶叫が、世界を揺らす。

「シオン……」

2人の声が、綺麗に重なる。

「今、行きます」

「シオン殿！！」

ケロロの指先をかいぐつたシオンは、飛んだ。

シオンの体はそのまま光に飲み込まれた。

目を開く。

青と赤の靄が、シオンの視界を満たした。

「ここは？」

水中にも似た無重力に、シオンは体を回し辺りを見回す。靄しか見えない世界だった。

その時だった。

実態を持つた青と赤が、シオンの視線に飛び込んだ。

「テララ！！ アスス！！」

シオンは走り出そうとするが、その脚は無意味に宙をかくだけ。水中のように泳ぎだし、やつと進む事が出来た。

2人は、小さな体で抱き合つて横たわっていた。アススの視線が、シオンとかち合う。

「シオン。なんで、来たんですか……」

憮然とした表情で、アススは口を開いた。

「それは――」

「早く戻つて。じゃないと、シオンも死にますよ」

アススはそう言つて、視線を伏せた。

「……え？」

シオンの面食らつた顔に、アススはプツと吹き出した。

「僕らは元々1つ。本来の姿に戻るため、彼が動いたんですよ。本能に突き動かされたんでしょうが、ね」

アススはテララを指差し、自嘲気味に笑つた。平然と、どこまでも平然とアススは笑う。

「さあ、あなたも僕らの融合に巻き込まれないうちに、早く逃げて下さい。あなたも愚かじやないでしょ」

なにも感じないような表情がアススの顔に張り付いた。

「……アスス」

「だから、早く――」

「聞くのです――」

シオンは、その時初めてアススの眼をしっかりと見つめた。

「あなたは私の……アススもテララも私の心の友なのです……だから……だから一緒に帰るのです」

そう言って、シオンは飛んだ。

「帰ります!! 私の……私たちの家へ!!」

アススだった光は頭を抱え悲痛な叫び声を上げた。

「何が起きてるありますか?」

「まずいな……」

不意にクルルが吐き出した言葉に、ケロロが振り向く。

「クルル!! マジで何が起きてるありますか?! 説明!!!」

「今までこいつが吸い込んだエネルギーが、右腕に貯まつてやがる」

「それ……どう言つ」とですか?」

クルルは視線を下げ、呻いた。

「このまま撃ち出される。そうすりゃ、地球は終わりだ

「何故?」

くくとクルルは笑う。

「エネルギーが地球に還元されなくなる。つまり地球はこのままのエネルギーは衰退する。下手すりや、氷河期まで追い込まれるぜえ

「ゲロ!? そんな事になつたらまずすぎるであります」

ケロロは頭を抱えた。悲鳴が上がる。

「どうすればいい?」

「地球上にエネルギーを還元すりやいい。右腕をなんとかして地球にくつつければ、なんとか還元されるだろ?」

「簡単に言つてくれる?」

「でも、やるしかないであります。ギロロ、ドロロ、奴を抑え引っ張つて。我輩も手伝うであります。タママ、右腕の固定。クルルは誘導、頼めるでありますか?」

一息で言い切つたヶ口口に、全員が頷いた。

「ケロロ小隊、総員を持ってアススねエネルギーを地球に還元する  
であります！！」

「了解！」

シオンが伸ばした手が、アススとテララを包み込む。

帰るのです 私たちの家へ

「アスス、私は

きから、わざと思つてた」

光と闇

喜びの端

全てが、溶け合う。

「あなたは負の存在なんかじやない。寂しかつただけだよね？」

ノルマニ

「漢字」

瞳から溢れた涙はとめどなく零れ落ちる。

「シオンと、生きたいよ……。1人はもう……嫌なんだ……」

「僕は生きたい！！」

熱い。

アススを掴んだケロロは思わず悲鳴を上げそうになった。エネルギーで溢れるアススの体は灼けるような熱を帯びていた。

「我輩だけ泣く訳には……いかんでありますな」

ケロロはそう呟くと、小隊を見つめた。全員歯を食いしばり、アススの体を引き摺る。

地上まではもう少し。1秒が1時間に思える時間の中でケロロは必死に食らいついた。

その時だった。

「ゲロ！？」

アススの体の発光が強くなつた。

「やばいぜえ隊長！ 時間がねえ！！」

クルルの上げた声に全員が顔を見合せた。

「急げ！！」

ギロロが吠えた。

熱が増す。

恐怖に近い感情がケロロ小隊を支配する。

「間に合わない……？」

ケロロが悲鳴を上げた、その瞬間だった。

「みんな、早くどいて！！」

不意に声が響いた。

聞き慣れたアルト。全員が体を退ける。

「風獄・螺旋華！！」

凜とした声と共に、黑白の帯が展開。アススを包み込むと、地面に叩き付ける。

「弥々華殿！！」

ケロロの歓喜の声に、弥々華は叫ぶ。

「早く、手を！！」

その言葉に全員がアススの右手を地面に固定する。キィイと鼓膜を歪ませる音が、地球を揺らす。刹那、エネルギーの奔流が世界を揺らした。

「ゲロ！？」

「うわ！？」

その奔流にケロロの手が離れた。さらさらタママの体が離れる。

「ケロロ、掴まれ！！」

「タママ殿！！」

ギロロとドロロは片手を伸ばす。だが、片手だけでは所詮体を支えきれない。

「「ぐわあ！！」」

4人の、そして近くにいたクルルと弥々華の体は、空中に吹き飛ばされた。

「ぐつ……なんだ？」

地面上に打ち付けられたティトは、それでも目を見開き前を見た。ベヒーモスの動きが、変わったのだ。先ほどまでせわしなく動いていた鼻は止まり、ぼうとこちらを見つめている。

その瞬間だった。

断末魔が響いたのは、  
バタリと轟音。

その巨体は横倒しになると、静かに田の光を失つた。

「……死んじやつたの？」

「分かんねえ」

ティトはふらつき始めたリップの肩を持つ。

次の瞬間、闇を凝縮したようなオーラがベヒーモスを包んだ。そのオーラが消えた時、ベヒーモスも消えていた。

同じような現象はガルル小隊の前でも起きていた。

「何が起きてるツスか？」

「トロロ新兵！」

ガルルの張り上げた声に、トロロは相変わらずの笑い声で答える。

「これを生み出した奴の反応が消えたヨ。死んだのかモネ」

「そうか」

ガルルはゆっくりと視線を伏せた。

何事も無かつたように、世界は平穏を取り戻したのだ。

「ガルル小隊、これより撤退する。ケロロ小隊に連絡を」

ガルルの命令にトロロは数秒パソコンを叩く。

「ダメ、繋がらないヨ？」

その言葉に、ガルルとブルルは顔を見合させた。

「まさか……」

ブルルが口を抑え、ガルルはカツと目を見開いた。

「軍曹？」

冬樹は思わず走り出した。

「軍曹……軍曹！！」

光と共にケロロ小隊は消えた。

テララもシオンもアススも。

「どこに行ったの……どこに行っちゃったのーー！」

元の形に戻ったモン・サン=ミッシェルを冬樹は疾走する。他の面々

も彼の後ろについて走った。

「軍曹おーー！」

冬樹の悲鳴は、夜明け前の世界に響き渡った。

To be continued

## Episode: 21

## もう一度、happy birthday(前書き)

赤い色は争いの色  
赤い色は不吉の色

僕は赤いよ 赤くて1人

赤くて不吉な世界と共に  
争いは僕の元で始まり終わる

失う物は無い 僕はずっと1人 それが僕の運命だから

孤独の砦 高き城

紅青2つの魂は いつしかやがて結びつく 僕が望むは安寧の闇

永久の世界 2人だけの

消え行く2つの御名の元  
終わり始まる物語

2つは1つ 1つは2つ  
孤独に終わる物語

## Episode: 21 もう一度、happy birthday

息を切らせた冬樹が、立ち止まる。目指したのは光が生まれた場所だった。深いクレーターが、エネルギーの強さを物語つていた。

「あ……」

冬樹の視線の先には、シオンが横たわっていた。

「シオン!!」

冬樹に追いついた桃華がクレーターを滑り降りる。全員が桃華の背中を追いかけた。

「う……ん……」

シオンは気が付いたのか、体をゆっくり起こす。その腕にはテララとアススが抱き寄せられていた。

「シオン!! 大丈夫? シオン!!」

「桃華?」

シオンはきょとんと目を開くと、桃華の顔をじーっと見つめた。

「無事で良かつた」

ぎゅうと抱きついた桃華に、シオンは目を閉じた。その時だった。

「シオンに抱き付かないでくださいよ……」

不意に響いたその声に、桃華は跳び上がる。

「……アスス?」

「なんですか?」

酷く不機嫌な顔でアススは桃華を睥睨した。だが大人しくシオンに抱き締められたまだ。

「えーッ!!?」

思わず桃華は、絶叫した。

「つるさいな……僕はもう破壊を止めたんですよ? 出来損ないを狙うのも」

「変わり過ぎじゃない……って程でもないかな?」

憮然とした表情で言い放つたアススに夏美は呻いた。

「余計なお世話です」

フンとアススは鼻を鳴らす。

高慢ではあるが明らかに殺意は抜けていた。

「じゃあこれでめでたしめでたし……って事?」

夏美は咳くと、冬樹の顔が曇った。

「まだ、まだ軍曹達が戻ってきて無い」

その言葉に全員の顔が曇る。

「約束したじゃないか……」「軍曹……」

冬樹はゆっくりと空を仰ぐ。

「軍曹……」「軍曹お———ツ！———！」

その瞬間だった。

「ゲエ———ロ———ツ！———！」

よく聞き慣れた悲鳴が響く。

ただし上から。

空から降つて来たケロロ小隊が地面に埋まるのは、それから数秒後  
の事だった。

「これでめでたしめでたし、かな?」

モン・サン＝ミショルの尖塔、そこに据えられた天使の像に座った

弥々華は静かに笑つた。

ケロロ小隊を抱き締めるパートナー達が小さく見えた。

「弥々華!!」

彼らに気を取られていた弥々華がひょいと体を仰け反らせた。

「リップ!! 大丈夫だった?」

頷いたリップは符に乗つたまま微笑む。

「ティートは？」

「ガルルさん達と合流して、Appuccinoに一旦帰るって」

「そつか……」

弥々華は下を見たまま、頷く。

「リップ……」

「どうしたの？」

俯いた弥々華の表情はよく見えない。

「いや、なんでも無いよ。それよりさ、あそこまで乗せてってくれない？ここじゃ飛べなくて」

上りだした朝日の中、弥々華はそう言つて微笑んだ。

広い病室に笑い声が響く。

「嘘……」

呻くような声の主は、何故か女にもかかわらずケロロ小隊と同じ病室に入れられた弥々華であつた。

「新聞に載るとは油断したな」

ギロロの渋い顔に、弥々華が頭を落とす。

弥々華が握り締めた新聞には『天使は実在した！！ モン・サン＝ミシヨルの奇跡』の見出しがフランス語で踊っている。

写真には天使の像に腰掛け穏やかに笑う弥々華が鮮やかに残された。能力解放状態であるせいか、天使の姿である。

「まあ、新聞に載るなんてめったに無い事ですし、大丈夫ですよ」にこにこ笑うのは新聞を持ち込んだシオンだ。その隣ではアススが仮頂面で座っている。テララはと言えばクルルのそばを離れず、当のクルルは不機嫌オーラ全開で黙りこくれていた。

「あの……」

その瞬間、静寂が落ちた。

口を開いたのはアススだった。

「話したい事があります」

口調は酷く淡々としたもの。だが表情は苦渋に満ちていた。

「なんでありますか？」

ケロロの問いにアススは、ケロロを見つめる。

「…………ごめん…………なさい」

おや、と弥々華は目を見開いた。

「あなた方を傷つけたあげく、僕の罪を不問にしてもらえた。シオノといられるのは、あなた方のお陰です」

く……と、アススは頭を下げた。

「ありがとう」

それは地球龍から生まれた『負』からの呪縛が解けた瞬間だった。

事件から1ヶ月。

ドラクーン家の中庭でパン、パンとクラッカーの音が鳴り響く。輪の中心になつたテララとアススは、それぞれ対照的な面もちでいた。テララは心底嬉しそうだが、アススはどうしようもなく不機嫌だ。

「テララ！！ アスス！！ happy birthday day！！」

テララとアススの誕生会は、事件から2週間後に行われた。

その間、ケロロ小隊は緊急入院という憂き目にあつたが、包帯やらなにやらも取れ、今は笑顔でグラスをぶつけ合っていた。

その間、ガルル小隊とリップは事後処理に追わっていたらしい。なんでも記憶清浄装置が結局見つからなかつたらしく、報告書と、アススを警察に引き渡さなかつたもに発生した報告書が山のようござまつてしまつたせいらしい。

入院中、お前は良いよなあとこぼされたあの顔が頭をよぎった。

ケロロ小隊も一言では無く、明日から地獄を見る羽目になるのだろうが。

さらにシオンにはアススのやってしまった事、全てが話されたと聞いた。

だがシオンは全てを受け入れると、署長に話したらしい。全てを受け入れ、償う手伝いをする、と。

アススにはA p a s c oから、有事には友軍となるように持ち掛けられていた。

アススは突っぱねたが、シオンに了承させられたらしく。

テララはと言えば入院を3日で終え、2人の後ろをついていた。だが争いや諍いは起きなかつた。

奇跡みたいだ、とシオンが見舞いの席で笑っていたのが頭に浮かんだ。

「本当だよ」

弥々華は小さく呟く。

こんな事、事件が起る前には予想だにしなかつた事だ。

「なにか言つたでありますか？」

弥々華は静かに首を横に振つた。

「なんでも無いよ」

そう言つて弥々華は、ケーキを口に放り込んだ。

薄暗い部屋。

ナスカは写真立てを放り投げる。ガラスの破片が、床に飛び散つたまま、ナスカは椅子に体を預ける。

「決行は近いよ、ナスカ」

愛おしい名前を口にすると、ナスカはメールの送信画面を眺めていた。

零れたのは、僅かな笑み。

「お前はまた生まれる。今度は救済の女神として悲劇の始まりは、近い。」

To be continued.....?

こんばんは、作者の百花です。

今回は『超小説版ケロロ軍曹 + black & white』であります  
3 撃侵力オストラゴンウォリアーであります』をお読みいただき  
まして誠にありがとうございました。

超小説版3は多分Cross Worldシリーズの中で2番目に  
長いお話になってしまいました。

アスス事件とResistance事件の双方を描写したためです  
が、正直驚きましたね。ここまで長くなるとは。

Resistance事件の方は連載中の次回作、Cross W  
orld 3「Good-bye my friends」に関わる物  
語ですので、そちらも読んでいただけたら嬉しいです。

最後になりますがここでスペシャルサンクスを。

アススは私のキャラクターではなく、mega12さんというゴー  
ザーさんにいただいたキャラクターです。

こんなに個性的なキャラクターを書かせて頂きありがとうございます。  
これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0014r/>

超小説版ケロロ軍曹 + black & whiteであります3 撃侵カオスドラゴンウォリア

2011年8月21日08時36分発行